

志 木 市 遺 跡 群

Ⅲ

1 9 9 1

埼玉県志木市教育委員会

はじめに

志木市教育委員会
教育長 秋山太藏

このたび、平成元年度の志木市遺跡群発掘調査の成果を報告書として刊行することができたことを喜ばしく思います。

志木市は、埼玉県の南東部に位置し、市内の地形は大まかに、市域中央を流れる新河岸川を境に西側が武蔵野台地と呼ばれる洪積台地、東側が荒川の形成した沖積地である荒川低地に分かれます。こうした自然環境の下、洪積台地の縁辺には埋蔵文化財の包蔵地が少なからず存在し、また、荒川低地にも馬場・宿遺跡のような台地下での存在が徐々に分かってきました。

特に、埋蔵文化財の包蔵地の集中する洪積台地上の志木市本町・柏町・幸町地区は、市街化の最も激しい地域でもあります。本来、これらの貴重な文化財は完全な形で保護・保存していくことが望ましいのですが、市教育委員会では各種の開発に伴う埋蔵文化財の保存に関しては、主に発掘調査による記録保存で対処しております。

そこで、今日においては何よりも、開発と文化財保護それぞれの重要性を理解した上で、双方が円滑に事業を進めて行けるよう努力することが必要であろうかと考えております。

志木市では昭和62年から、個人専用住宅建設者に対する発掘調査費用の負担軽減を図り、同時に埋蔵文化財の重要性を理解して頂くために、国庫及び県費の補助金の交付を受けて調査を進めております。平成元年度は、確認調査・発掘調査を併せ、18ヵ所をかぞえ、多大な成果をあげたものと信じております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、文化庁・埼玉県教育委員会ならびに地元の多くの方々のご指導・ご協力に深く感謝するとともに、本書が郷土の歴史研究のために広く活用されて頂ければ幸いに存じます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市内に所在する遺跡群の、平成元年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会が主体となり、国庫及び県費の補助金の交付を受け、平成元年4月3日より平成2年3月31日まで実施した。
3. 本書の作成は志木市教育委員会が行い、編集は尾形則敏が担当した。また、執筆は下記のように分担した。

第1・2章 佐々木保俊 第3章 尾形則敏

4. 挿図版の作成は執筆者が行ったが、金野照子・深井恵子の協力を得た。
5. 本書の遺構・遺物の挿図版の指示は、以下のとおりである。

○挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

○遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。また、ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。

○遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

○遺構の略記号は、以下のとおりである。

H＝古墳時代・平安時代住居跡、D＝土坑

○遺物挿図版中の網点スクリーントーンは基本的に赤彩範囲を示すが、土器番号下に黒彩とあるものは、黒色土器の黒彩範囲を示す。

6. 調査組織

調査主体者 志木市教育委員会

教 育 長 秋山太藏

事 務 局 次 長 大西 弘（～平成2年3月）

星野昭次郎（平成2年4月～）

社会教育課長 白砂正明

社会教育係長 山中政市

社会教育課主査 下河辺信行

主任 佐々木保俊・佐藤浩之

主事 尾形則敏・前川美香

発掘担当者 佐々木保俊・尾形則敏

7. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局指導部文化財保護課・埼玉県立博物館・埼玉県立歴史資料館・埼玉県立さきたま資料館・埼玉県立埋蔵文化財センター・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・志木市立郷土資料館・志木市立志木第三小学校

会田 明・浅野晴樹・麻生 優・荒井幹夫・飯田充晴・石井 寛・井上洋一・梅沢太久夫・

岡田威夫・片平雅俊・倉沢和子・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・笹森健一・
斯波 治・鈴木一郎・鈴木重信・田中広明・坪田幹男・中島岐視生・中村倉司・並木 隆・
根本 靖・野沢 均・早坂廣人・藤波啓容・松本 完・松本富雄・宮瀧由紀子・柳井章宏・
和田晋治・渡辺邦仁

8. 発掘調査及び整理作業参加者

調査補助員(発掘調査及び整理作業)

金野照子・深井恵子

発掘協力員

内野美津江・小野説子・鹿沼美智子・清水加代・宮本田ず子・村井京子・本橋枝美子

整理協力員

内野美津江・小野説子・鹿沼美智子・宮本田ず子

目 次

はじめに

例 言

目 次

図版目次

挿図目次

第 1 章 平成元年度調査成果の概要	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査成果の概要	2
第 2 章 西原大塚遺跡第11地点の調査	5
第 1 節 遺跡の概要	5
第 2 節 検出された遺構と遺物	6
第 3 章 城山遺跡第 7・9 地点の調査	11
第 1 節 遺跡の概要	11
第 2 節 検出された遺構と遺物	12
第 3 節 ま と め	33

図版目次

図版 1	西原大塚遺跡第11地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版 2	〃	2号方形周溝墓、東溝・西溝・北溝
図版 3	〃	2号方形周溝墓遺物出土状態、1号壺棺出土状態・掘り方
図版 4	〃	2号方形周溝墓出土遺物・1号壺棺
図版 5	城山遺跡第7地点	(上) 調査区近景 (下) 発掘風景
図版 6	〃	68A・B号住居跡、刀子出土状態、69号住居跡
図版 7	〃	69号住居跡遺物出土状態
図版 8	〃	(上) 68A号住居跡出土遺物 (下) 69号住居跡出土遺物
図版 9	城山遺跡第9地点	(上) 調査区近景 (下) 70・74号住居跡
図版10	〃	(上) 70号住居跡カマド遺存状態 (下) 71号住居跡
図版11	〃	(上) 72号住居跡 (下) 73号住居跡
図版12	〃	(上) 73号住居跡遺物出土状態 (下) 75号住居跡
図版13	〃	63号土坑遺物出土状態、61・62・64・65号土坑
図版14	〃	(上) 71号住居跡出土遺物 (下) 72号住居跡出土遺物
図版15	〃	(上) 73号住居跡出土遺物 (下) 75号住居跡出土遺物
図版16	城山遺跡第7・9地点	(上) 住居跡出土土製品・鉄製品 (下) 63号土坑出土遺物

挿 図 目 次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	3
第2図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	5
第3図	遺構分布図 (1/300)	6
第4図	2号方形周溝墓 (1/60)	7
第5図	1号壺棺墓 (2/25)	9
第6図	2号方形周溝墓出土遺物・1号壺棺 (1/4)	10
第7図	周辺の地形と調査地点 (1/5000)	11
第8図	遺構分布図 (1/300)	12
第9図	68A号住居跡 (1/60)	13
第10図	68B号住居跡 (1/60)	13
第11図	68号住居跡出土遺物 (1/4)	14
第12図	69号住居跡 (1/60)	15
第13図	69号住居跡出土遺物 1 (1/4)	16
第14図	69号住居跡出土遺物 2 (1/4)	17
第15図	70・74号住居跡 (1/60)	19
策16図	71号住居跡 (1/60)	20
第17図	71号住居跡出土遺物 1 (1/4)	21
第18図	71号住居跡出土遺物 2 (1/4)	22
第19図	72号住居跡 (1/60)	24
第20図	72号住居跡出土遺物 (1/4)	24
第21図	73号住居跡 (1/60)	25
第22図	73号住居跡出土遺物 1 (1/4)	26
第23図	73号住居跡出土遺物 2 (1/4)	27
第24図	75号住居跡 (1/60)	29
第25図	75号住居跡出土遺物 (1/4)	29
第26図	住居跡出土土製品・鉄製品 (1/3)	30
第27図	土坑 (61・62・64・65号土坑=1/60、63号土坑=1/30)	31
第28図	63号土坑出土遺物 (1/5)	32

第1章 平成元年度調査成果の概要

第1節 調査に至る経過

志木市は、埼玉県の南東部に位置し、その地形は大略、北東部は荒川（旧入間川）が形成した荒川低地、北西部は柳瀬川が開析した低地となり、南部はそれらの低地に挟まれるように舌状に突出した台地となる。この台地は武蔵野台地の先端部にあたり、市域の遺跡の大部分は台地縁辺部に存在する。

当市は、都心へ25kmという距離に位置し、交通の便もよいため、都心近郊のベッドタウンとして、昭和40年前後から急激に人口増加してきたが、これに伴い各種開発行為も増大してきた。現在、その現象は以前程ではないが、それでも住宅建設を中心とした開発行為は少なくなく、これが埋蔵文化財包蔵地におよぶことも多々でてきている。このような中で、教育委員会は文化財行政を行ってゆくうえで、埋蔵文化財を保護・保存してゆくのが重要な課題となっているが、これに対しては主に記録保存という処置によって対処しているのが現状である。

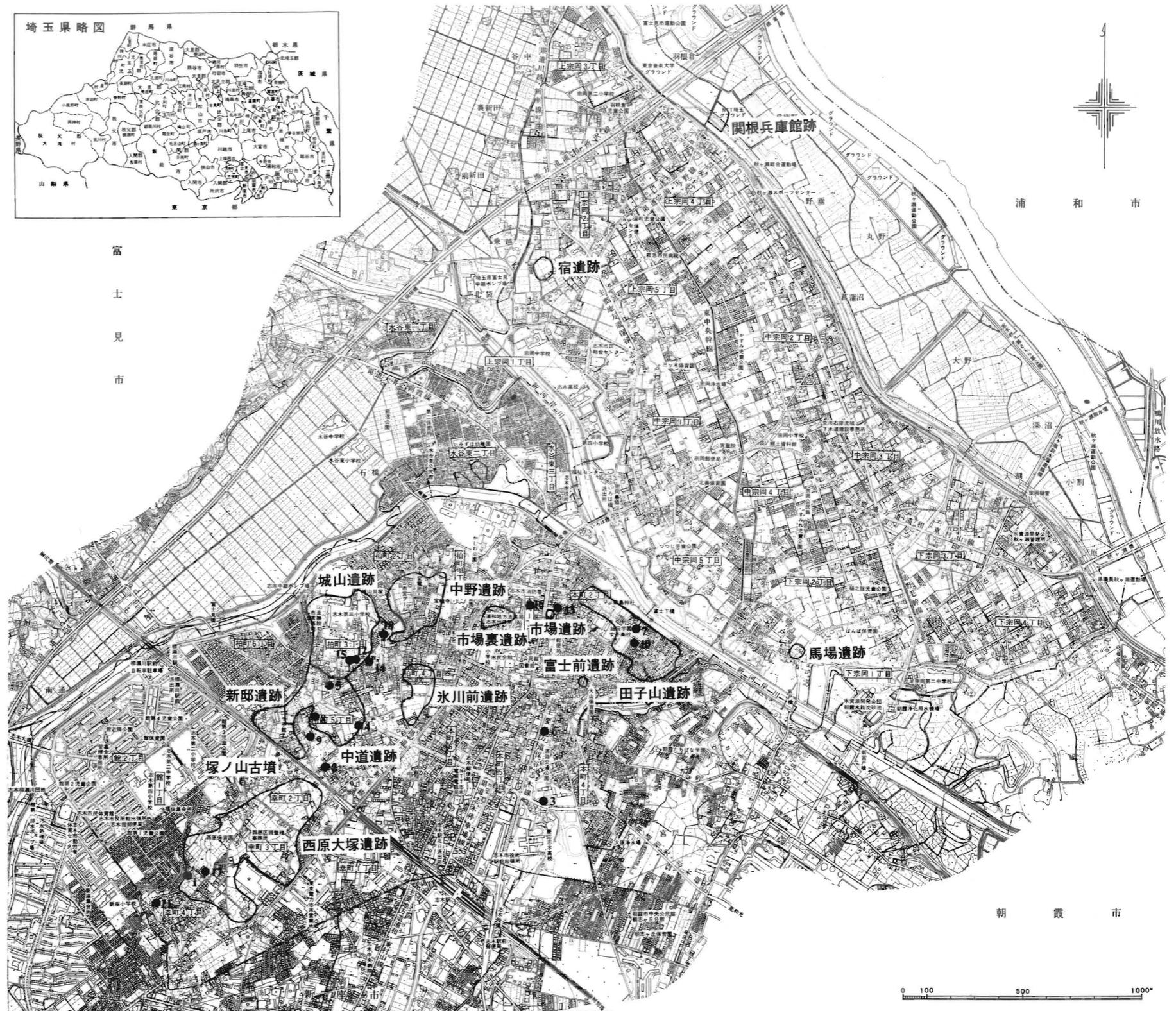
番号	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間
1	西原大塚遺跡第11地点	志木市幸町4丁目3386-1	220.84	平成元年5月16日～25日
2	中道遺跡第10地点	柏町5丁目2887-54	937.05	6月21日
3	本町4丁目1111	本町4丁目1111-16・17	350.00	9月8日
4	中道遺跡第11地点	柏町5丁目2912-3, 2918-29	300.00	9月8日
5	中道遺跡第12地点	柏町5丁目2954	977.96	9月14日
6	本町4丁目1949	本町4丁目1949-26	297.52	9月25日
7	田子山遺跡第4地点	本町2丁目1693-1～7, 1694-9, 1694-12	896.00	9月26日
8	中道遺跡第13地点	柏町5丁目2945-1	1209.00	10月5日
9	中道遺跡第14地点	柏町5丁目2939-7, 2940-2, 2941-1	230.00	11月7日
10	田子山遺跡第5地点	本町2丁目1731-2	667.00	11月10日
11	西原大塚遺跡第12地点	幸町4丁目3479-3・4	210.55	11月13日
12	城山遺跡第7地点	柏町3丁目2665-7	130.00	11月17日～12月4日
13	市場遺跡第2地点	本町2丁目1624-1	711.24	11月23日
14	城山遺跡第8地点	柏町3丁目2660-7	132.13	11月23日
15	城山遺跡第9地点	柏町3丁目2665-4	330.49	12月4日～18日
16	市場遺跡第3地点	本町1丁目1587-17	85.95	12月8日
17	西原大塚遺跡第13地点	幸町3丁目3115-3・4	205.21	平成2年1月23日
18	城山遺跡第10地点	柏町3丁目2595-10・11	330.49	3月16日
合 計			8241.43	

(第1図の番号と一致)

さて、当市における開発行為、特に住宅建設については小規模なものが多いが、その中で開発当事者が個人で、その個人が専用に使用する住宅の建設についての記録保存の実施については、費用の負担など困難な点が多かった。また最近、人口増加が始まった頃に建設された個人住宅の建て替えも多くなってきており、これについても対処してゆく必要もでてきている。そのため、昭和62年度からは国・県よりの補助金の交付を受け、これに対応してゆくことにした。なお、平成元年度は試掘調査も含めて、以下に示した18地点の調査を実施した。

第2節 調査成果の概要

1. にしほらおおつか西原大塚遺跡第11地点 後述。委保第5の2644、平成元年12月19日付。
2. なかもち中道遺跡第10地点 試掘調査。
3. 本町4丁目1111-6・17 試掘調査。
4. 中道遺跡第11地点 試掘調査。
5. 中道遺跡第12地点 試掘調査。
6. 本町4丁目1949-26 試掘調査。
7. たごやま田子山遺跡第4地点 試掘調査。
8. 中道遺跡第13地点 試掘調査。
9. 中道遺跡第14地点 試掘調査。
10. 田子山遺跡第5地点 試掘調査。
11. 西原大塚遺跡第12地点 試掘調査。
12. しろやま城山遺跡第7地点 後述。委保第5の298、平成2年5月21日付。
13. いちば市場遺跡第2地点 試掘調査。
14. 城山遺跡第8地点 試掘調査。
15. 城山遺跡第9地点 後述。委保第5の448、平成2年5月21日付。
16. 市場遺跡第3地点 試掘調査。
17. 西原大塚遺跡第13地点 試掘調査。
18. 城山遺跡第10地点 試掘調査。



富士見市

浦和市

朝霞市

第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)

第2章 西原大塚遺跡第11地点の調査

第1節 遺跡の概要

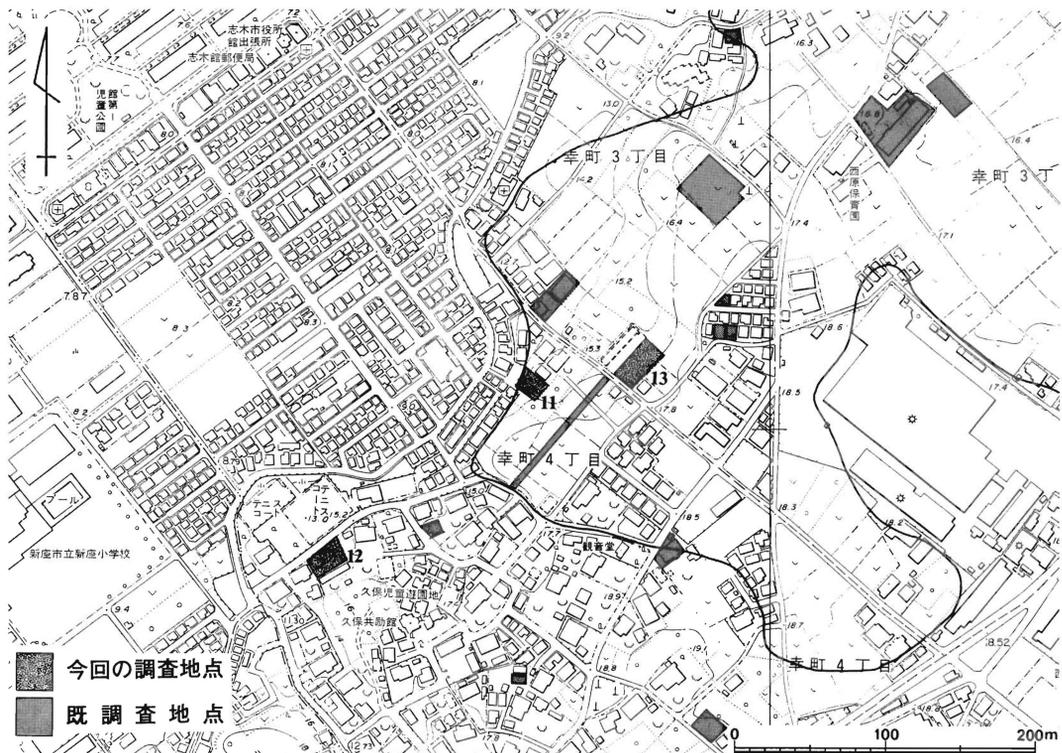
(1) 立地と環境

西原大塚遺跡は、志木市の南西に位置する市域最大の集落跡である。遺跡は柳瀬川を北東に臨む台地上にあり、標高は南端で約18m、北端で約14mを測り、北にゆくにつれてゆるやかに標高が低くなっている。これは本市の台地部分が、東京都青梅市を扇頂とする、古多摩川の扇状地として形成された、武蔵野台地の東端に位置し、南西から北東に舌状に突出するためである。なお、柳瀬川の開析した低地は、標高8m前後を測る。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が行われ、以後の調査で、縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、平安時代の集落跡であることが知られており（谷井・宮野 1975、志木市史編さん室 1984、佐々木・尾形 1985・1987・1989・1990）、また、平成2年度の志木市遺跡調査会の調査では、旧石器時代の石器集中分布地点も発見されている。

(2) 発掘調査の経過

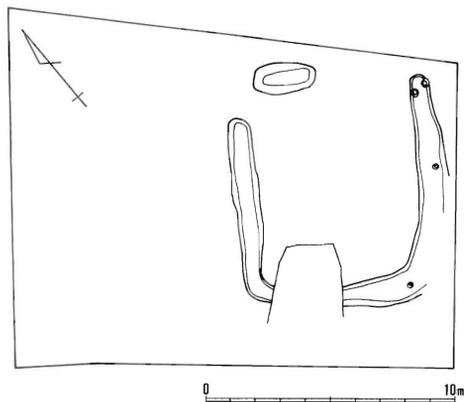
発掘調査は、平成元年5月16日から開始した。東西方向に3本のトレンチを設定、南側から1～



第2図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

3トレンチとし、バックホーを使用して1トレンチから試掘調査を行った。その結果、溝状の遺構が検出されたため、遺構の発見されなかった西側を土置場として、東側の過半の表土剥ぎを行った。

翌17日からは人力による遺構確認作業を実施したが、溝状の遺構が北側が開く「コ」字状になることが判明した。また、北側にも短い溝状の遺構がみられ、方形周溝墓の可能性が出てきた。19日からは遺構の調査を開始、西溝からは埴形土器が、東溝からは壺形土器などが出土し、方形周溝墓である蓋然性が高まった。また、東溝には壺棺と考えられる壺形土器も検出された。その後、周溝内側の精査を行い主体部の発見に努めたが、未確認に終わった。22日には土層図・平面図・断面図の作成を実施、24日には写真撮影、壺棺の実測などを行い、25日には埋め戻しを完了し調査を終了した。



第3図 遺構分布図(1/300)

第2節 検出された遺構と遺物

2号方形周溝墓 (第4図)

〔周溝の構造〕 東・南・西溝は連結し、平面形「コ」字状を呈する。北壁は短く、西側に寄っている。なお、南溝には一部攪乱が入っている。

〔東溝〕 南東コーナー付近の外壁が部分的に調査できなかった。長さ8.7m、開口部幅90~120cm、溝底部幅25~35cm、深さ17~40cmを測り、北側で途切れる。また、溝自体は外湾ぎみである。溝底は平坦で、壁は急斜に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。

〔南溝〕 溝の西側に大きく攪乱が入る。南東コーナー部が不明であるが、長さ8m前後を測ろうか。開口部幅60~110cm、溝底部幅40~80cmで、東側に向けて広がっている。深さは18~35cmを測り、溝底は東側では平坦であるが、西側では断面形「U」字状を呈する。

〔西溝〕 長さ7m、開口部幅70~110cm、溝底部幅50~70cm、深さ18~40cmを測り、ほぼ直行し、北側で途切れる。溝底はほぼ平坦で、壁は急斜に立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。

〔北溝〕 長さ2.4m、開口部幅90~130cm、溝底部長さ180cm、溝底部幅40~50cm、深さ90cm前後を測る。縦断面では溝底は西側が僅かに窪み、壁は急斜に立ち上がる。横断面は葉研掘状を呈する。

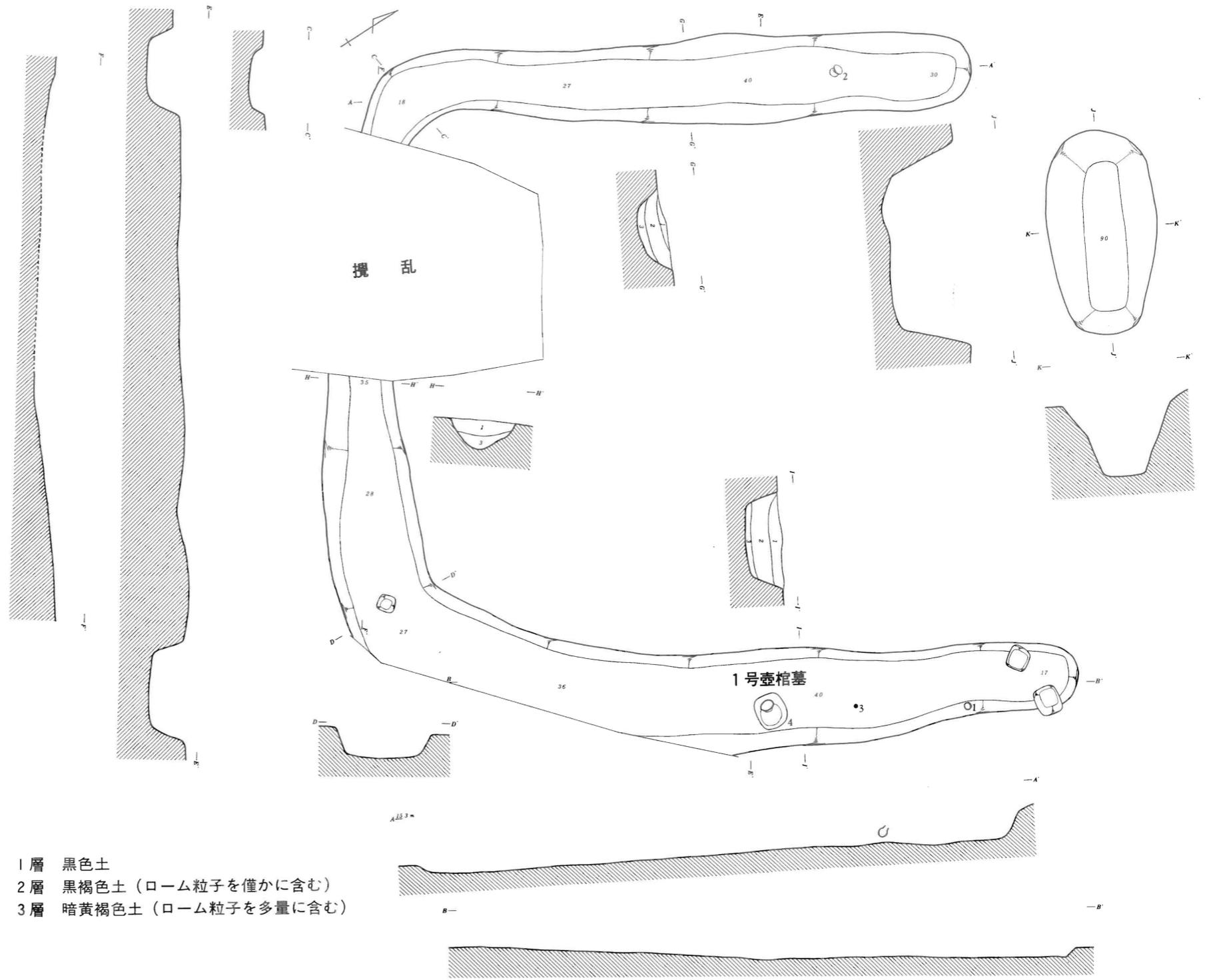
〔覆土〕 基本的には、上層は黒色土、下層がローム粒子を多量に含む暗黄褐色土で、すべての溝に共通する。周溝内側からの土の流れ込みの状態は特にみられなかった。

〔遺物〕 図示した以外は、すべて小破片で非常に少なかった。

〔時期〕 五領式期。

2号方形周溝墓出土遺物 (第6図1~3)

1は短頸壺形土器。胴部は偏球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は短く外反する。



第4図 2号方形周溝墓 (1/60)

外面及び口縁部内面はていねいに磨かれるが、部分的にハケ目を残す。底面にはハケ目を顕著に残す。胴部内面はナデられる。東溝北側のブリッジに近い外壁よりの覆土上部から、横転した状態で出土した。完形。

2は埴形土器。器壁が非常に薄くていねいなつくりである。底部は小さな平底を呈し、胴部は最大径を中位にもち、やや偏平な球状となる。頸部は「く」字状に強く屈曲し、内面は税い稜を形成する。口縁部は長く直線的に外反する。外面及び口縁部内面はていねいに磨かれる。胴部内面はナデられる。西壁北よりの中央部、覆土上部から横転した状態で出土した。完形。

3は壺形土器。最大径を胴部中位にもつ。胴部は僅かに偏球状を呈し、頸部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外反する。外面及び口縁部内面は磨かれるが、ハケ目を残す。胴部内面はナデられるが、下半にはハケ目を残す。東溝北より、ほぼ中央の覆土上部からの出土で、破碎されたような状態であった。口縁部を欠損する。

1号壺棺墓（第5図）

〔構造〕 2号方形周溝墓の東溝中央から、やや北に偏った位置で検出された。溝調査の当初は、掘り込みの存在は確認できなかったが、壺棺の存在が判明した時点での観察では、溝がある程度埋没した段階での埋納が想定できた。掘り込みは溝外壁に接した部分にあり、溝底での掘り込みの形状は42×38cmの楕円形を呈し、坑底は径22cmの円形である。壺棺は口縁部を周溝の内側に向けて斜め上向きに埋納されていた。壺棺内に遺物は存在しなかった。

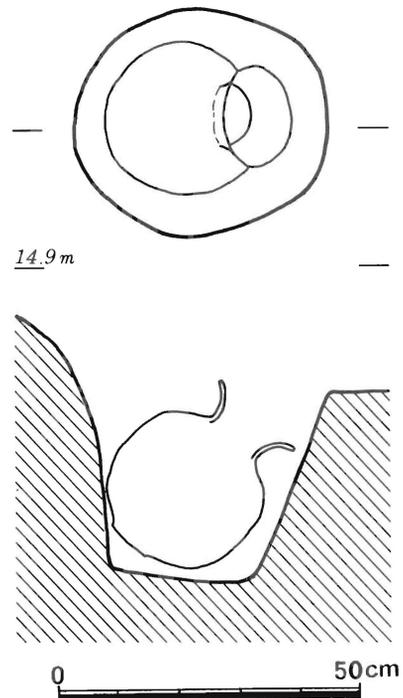
〔時期〕 五領式期。

1号壺棺（第6図4）

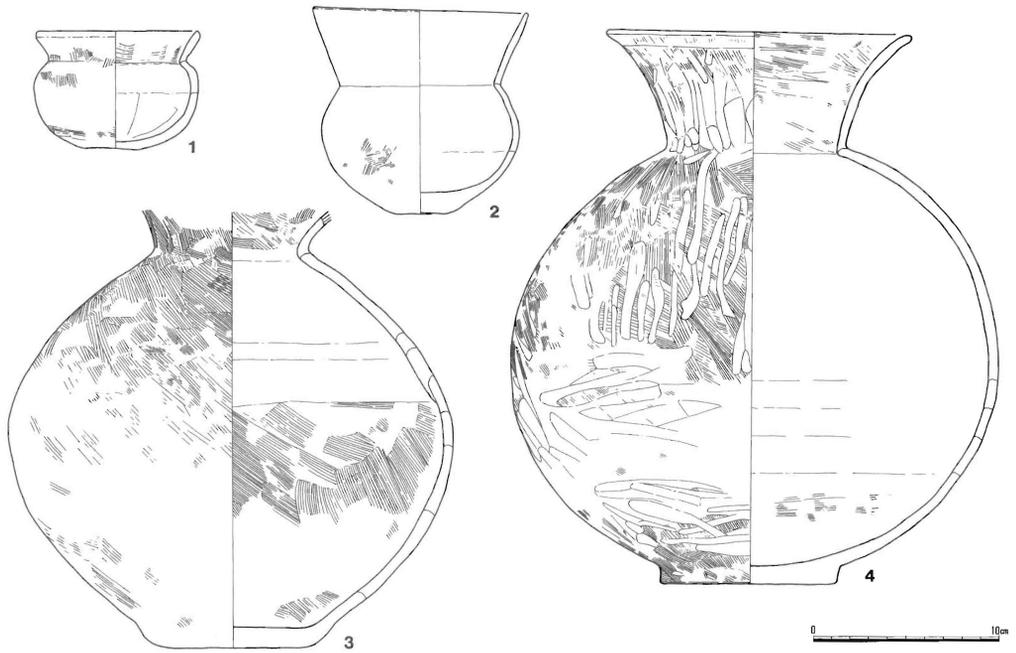
まったく破損のない壺形土器である。胴部は中位に最大径をもち球状を呈する。頸部は鋭く屈曲し、口縁部は外湾しながら「ハ」字状に開く。外面は口縁部上端は横ナデ、それ以下は磨かれるが、ハケ目を残す。内面は口縁部は磨かれるが、ハケ目を残す。胴部はナデられる。非常にていねいなつくりで堅緻である。

〔所見〕 本遺構は、方形周溝墓とそれに付随する壺棺墓という二つの要素から成り立つ。

方形周溝墓は隣合う二箇所のコナーにブリッジをもつものと考えられるが、独立した北溝は非常に短く、他の溝と比較してその断面形や深度に大きな差異をもつ。しかし、位置関係、覆土の類似から同一の遺構としてとらえた。遺物は東溝から短頸壺形土器・壺形土器、西溝から埴形土器が出土したが、いずれも覆土上部からの検出である。しかし、遺構が確認できたのがローム面であったことを考えると、必ずしも覆土の最上部とはいえない。おそらく、完形の短頸壺形土器と埴形土



第5図 1号壺棺墓(2/25)



第6図 2号方形周溝墓出土遺物・1号壺棺 (1/4)

器は、溝がある程度埋没した段階で、マウンド側から転落したものと思われる。

ところで、もう1点の壺形土器は破碎されたとされる状態で検出された。この想定が正しいとすると、この土器は他の2点と異なり、原位置を保っていると考えられ、溝がある程度埋没した段階の溝中での葬送儀礼があったことになる。壺棺墓に近い位置にあることを考えれば、あるいは方形周溝墓本体への葬送儀礼というよりも、壺棺墓に対するそれと考えたほうが良いのかもしれない。ただ、一義的な葬送儀礼に使用されたとされる2個の完形土器と壺棺・破碎されたとされる土器の間には、さほど時間差があるとは思えないので、極めて近接した時期のできごとであったと考えられる。

第3章 城山遺跡第7・9地点の調査

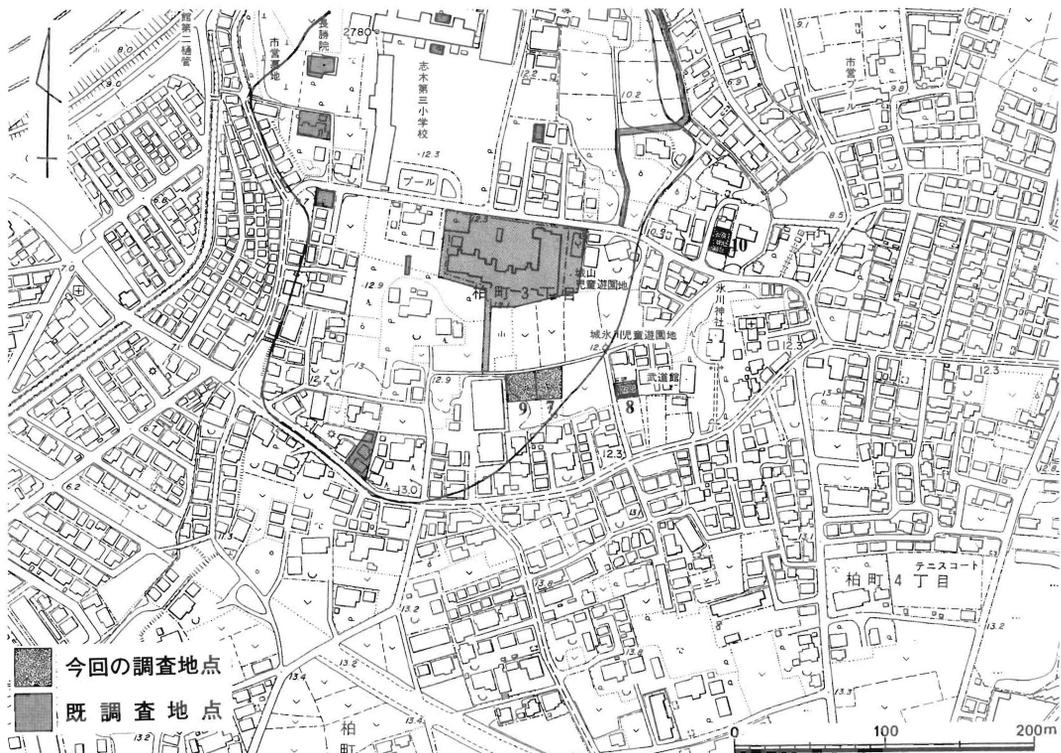
第1節 遺跡の概要

(1) 立地と環境

城山遺跡は、志木市西部の柏町3丁目を中心とする遺跡で、富士見市との境を北東方向に流れる柳瀬川によって開析された低地を臨む台地上にある。標高は約12m、低地との比高差約5mを測り、遺跡の現況は畑地を僅かに残す程度で、宅地化が急速に進行している。

本遺跡の第1回目の発掘調査は、昭和49年に志木市教育委員会によって実施され、縄文時代前期（諸磯a式）の住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡1軒、溝状遺構1本が検出されている。昭和55年には志木市が主体となり発掘調査が行われ、「柏の城」大堀跡の確認がされ、57年には古墳時代後期の住居跡と溝状遺構が検出されている。

昭和60年には志木市遺跡調査会により、古墳時代前期の住居跡1軒・後期52軒、平安時代の住居跡7軒、さらに「柏の城」大堀、中・近世の土坑・井戸跡が検出された。同時にこの調査は市内における発掘調査体制の本格的組織化の発端となり、以降志木市の文化財保護を推進する上で発展的転換になった。昭和61年には、志木ロータリークラブのボランティア事業の一環として、市教育委員会が主体となり発掘調査が行われ、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡1軒、古墳時代後期



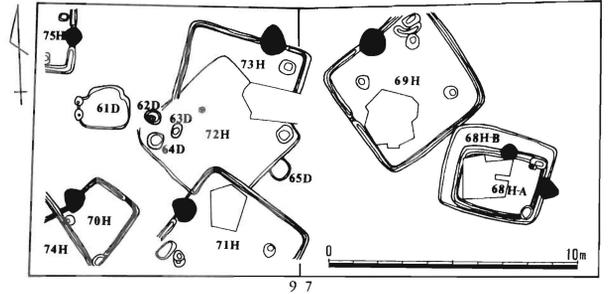
第7図 周辺の地形と調査地点 (1/5000)

の住居跡3軒、土坑17基が検出された。

昭和62年からは国庫及び県費の補助金を受け、個人専用住宅建設等に伴う発掘調査を実施し、同年の発掘調査では、縄文時代中期の埋甕1基、弥生時代末葉から古墳時代初頭の住居跡1軒、歴史時代の土坑3基が検出された（志木市史編さん室 1984・1986、佐々木 1987、佐々木・尾形 1988・1989）。

（2）発掘調査の経過

第7地点と第9地点は、開発目的は異なるが隣接しており、開発時期もほぼ同時期ということもあり、調査順序として、まず第7地点を終了させその後継続して第9地点の調査を行う予定をとった。排土については、両地点を交代でその置き場を使用することにした。



第8図 遺構分布図(1/300)

第7地点の発掘調査は、平成元年11月17日から開始した。調査区に合わせ、ほぼ東西方向にトレンチを3本設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎながら遺構確認作業を行った結果、住居跡と思われる黒い落ち込みを2ヶ所確認した。20日からは遺構の精査を開始、遺構は古墳時代後期の住居跡1軒（69H）、平安時代の住居跡1軒（68H）であることが判明した。23日までには平安時代の住居跡、12月2日には古墳時代後期の住居跡の写真撮影・実測を終了する。

第9地点は第7地点の東側に隣接し、第7地点の発掘調査の際に排土置き場として借用していた箇所である。本地点の発掘調査は、平成元年12月4日から開始した。まず排土を第7地点に戻した後、表土剥ぎ及び遺構確認作業を行ったが、表土剥ぎは第7地点において遺構が確認されたため、あらかじめ調査区全域の表土を剥ぐこととした。その結果、調査区内には古墳時代中期の住居跡1軒（72H）・後期5軒（70・71・73～75H）、土坑5基（61～65D）が密集して分布していることが判明した。5日からは遺構の精査を開始、18日までには各遺構の写真撮影・実測を終了し、27日には埋め戻しを行い、調査を完了した。

第2節 検出された遺構と遺物

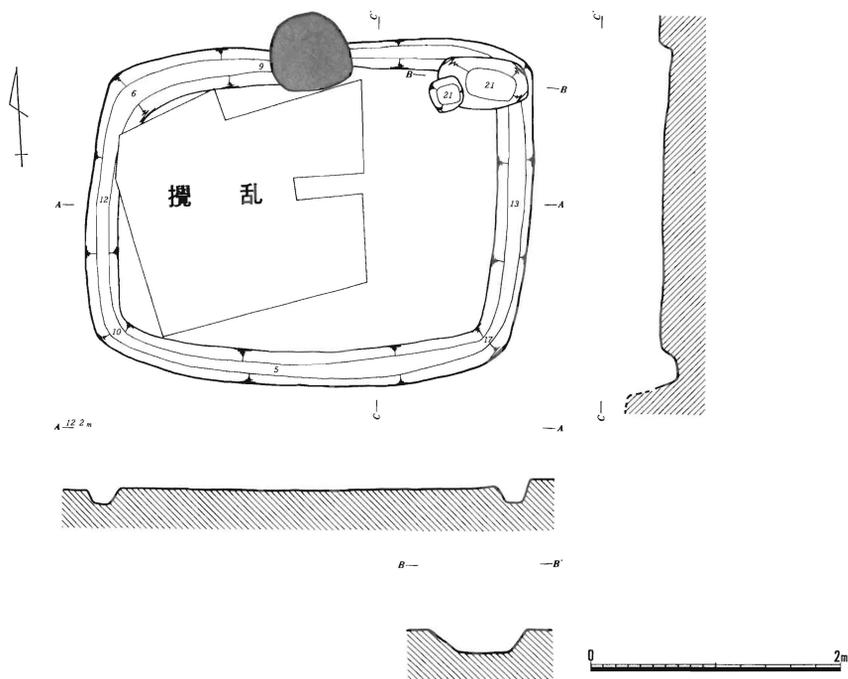
（1）住居跡

68号住居跡（第9・10図）

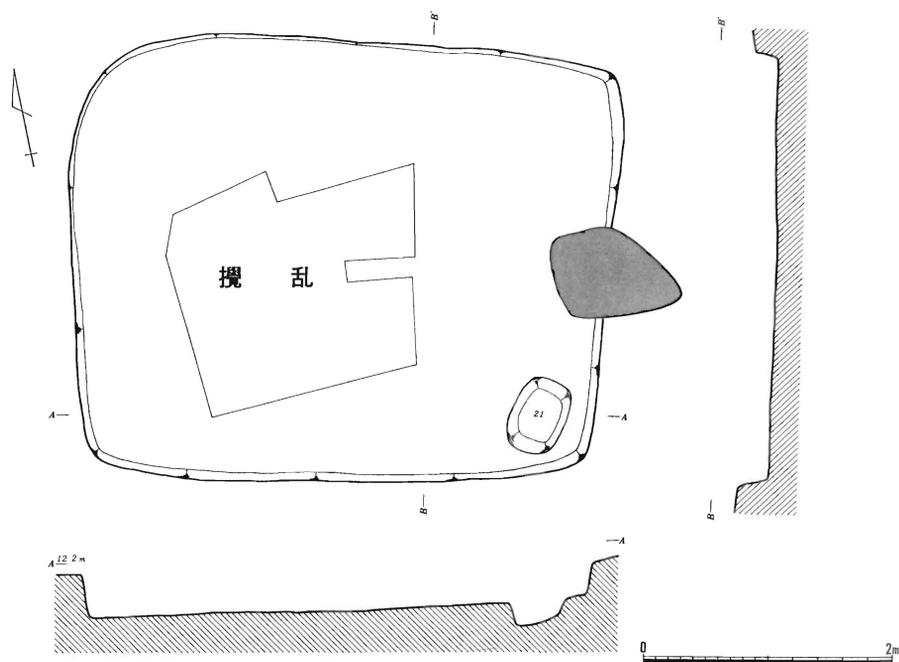
〔住居構造〕掘り方精査時に貼床下から、新たな住居跡が検出されたことより、本住居跡は拡張住居と考えられる。拡張前をA号住居跡、拡張後をB号住居跡として説明する。

A号住居跡（第9図）

（平面形）長方形。（規模）3.58×2.76m。（壁溝）上幅25cm・下幅12cm、深さ5～17cmを測り、



第9図 68A号住居跡 (1/60)



第10図 68B号住居跡 (1/60)

カマド部分を除いて全周する。(床面)中央付近に硬化面を僅かに残すのみで、大部分が攪乱により破壊されている。(カマド)北壁中央に痕跡として残る程度である。方位はN-3°-W。長さ62cm・幅64cmを測る。(貯蔵穴)カマド右側の北東コーナーのピットであろうか。平面形は長方形を呈し、72×40cm・深さ21cmを測る。

B号住居跡(第10図)

(平面形)長方形。(規模)4.38×3.54m。(壁高)20~36cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(床面)住居中央及びカマド前面は、硬く踏み固められているが、大部分が攪乱を受けている。(カマド)東壁中央に位置し、方位はN-68°-W。長さ112cm・幅76cm・壁への掘り込み60cmを測る。カマド底面は単純な椀状を呈し、灰褐色粘土は右袖部に僅かに残る程度である。(貯蔵穴)カマド右側の南東コーナーに位置する。平面形は長方形を呈し、62×44cm・深さ20cmを測る。覆土は焼土小ブロックを多く、炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。(覆土)ローム粒子・焼土粒子炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

〔遺物〕A号住居跡からは、ほとんど出土しなかった。B号住居跡からは、床上8cmの位置から刀子が1点出土したが、遺物の出土量は極めて少ない。

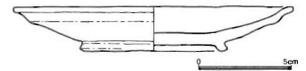
〔時期〕国分式期。

68号住居跡出土遺物(第11図、第26図1・2)

すべてB号住居跡からの出土である。

須恵器皿形土器(第11図)

口縁部下端にやや強めの稜をもち、高台は付け高台である。床面上の出土で、遺存度は1/4程である。



第11図 68号住居跡
出土遺物

鉄製品(第26図1・2)

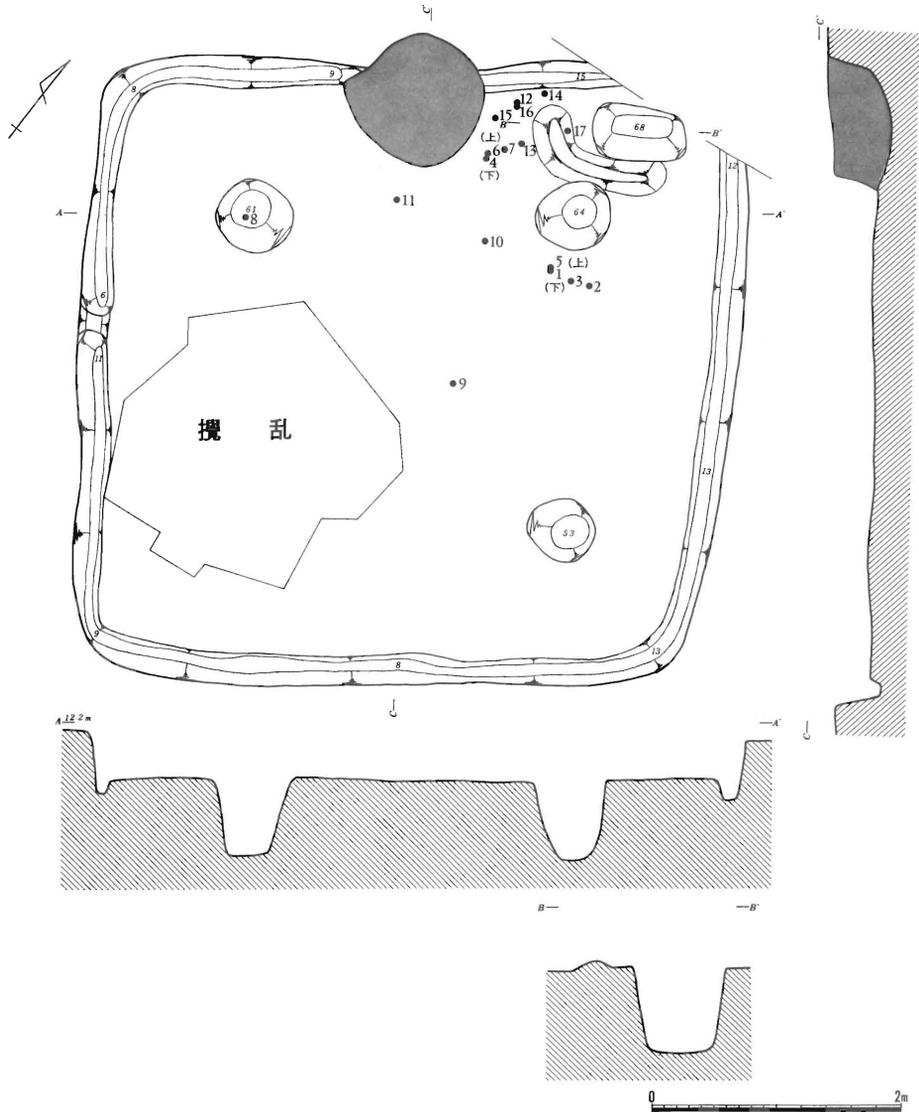
1は刀子である。刀部10.8cm・茎部4.6cm・全長15.4cmを測り、完形である。重さ18.3g。

2は平面形が3.3×2.9cmの長方形、断面形が「コ」字状を呈する。厚さ0.2cm。重さ9.9g。

69号住居跡(第12図)

〔住居構造〕北コーナーの一部が調査区外にある。(平面形)正方形。(規模)5.30×5.08m。(壁高)30~40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝)上幅15cm・下幅10cm前後、深さ6~15cmを測り、カマド部分を除いて全周する。(床面)住居中央及びカマド前面は、硬く踏み固められているが、南コーナー付近は大きく攪乱を受けている。(カマド)北東壁中央に位置し、方位はN-37°-W。長さ108cm・幅112cm・壁への掘り込み30cmを測り、両袖部はロームを馬蹄形状に隆起させ残し、その上部・天井部に灰褐色粘土を被覆させ構築している。(柱穴)主柱穴4本で構成されるものと考えられる。南コーナーの1本については、攪乱により不明である。(貯蔵穴)カマド右側の北コーナーに位置し、平面形は長方形を呈し、75×45cm・深さ68cmを測る。また、南側には高さ7cm程で弓状を呈する凸堤がめぐっている。覆土はローム粒子・粘土粒子を含む暗褐色土を基調とする。(覆土)ローム粒子・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

〔遺物〕カマド前面及び貯蔵穴付近から土器が多く出土した。



第12図 69号住居跡 (1/60)

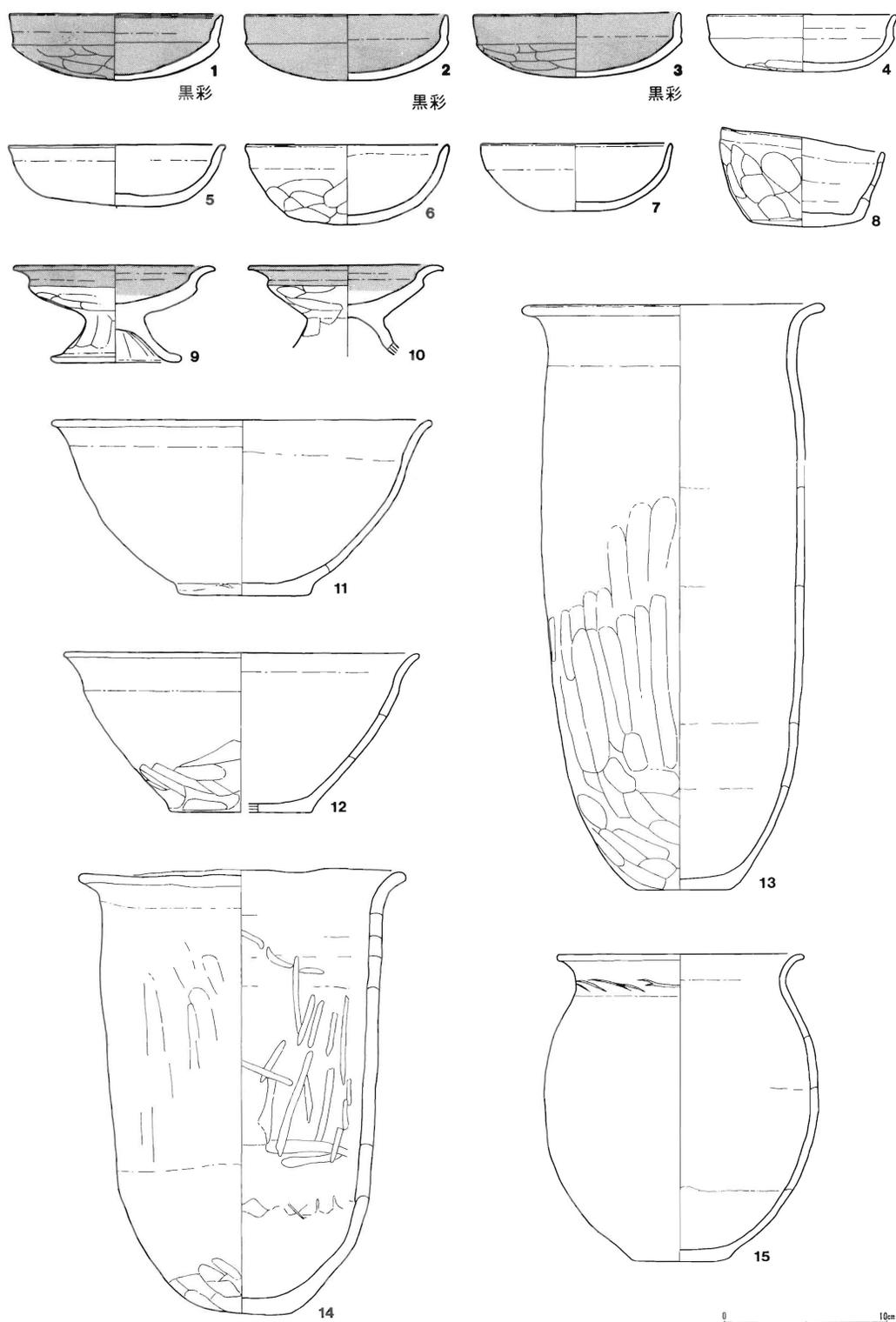
〔時期〕 鬼高式期。

〔所見〕 覆土中に多くのローム粒子・ロームブロックが含まれることから、埋め戻された可能性がある。

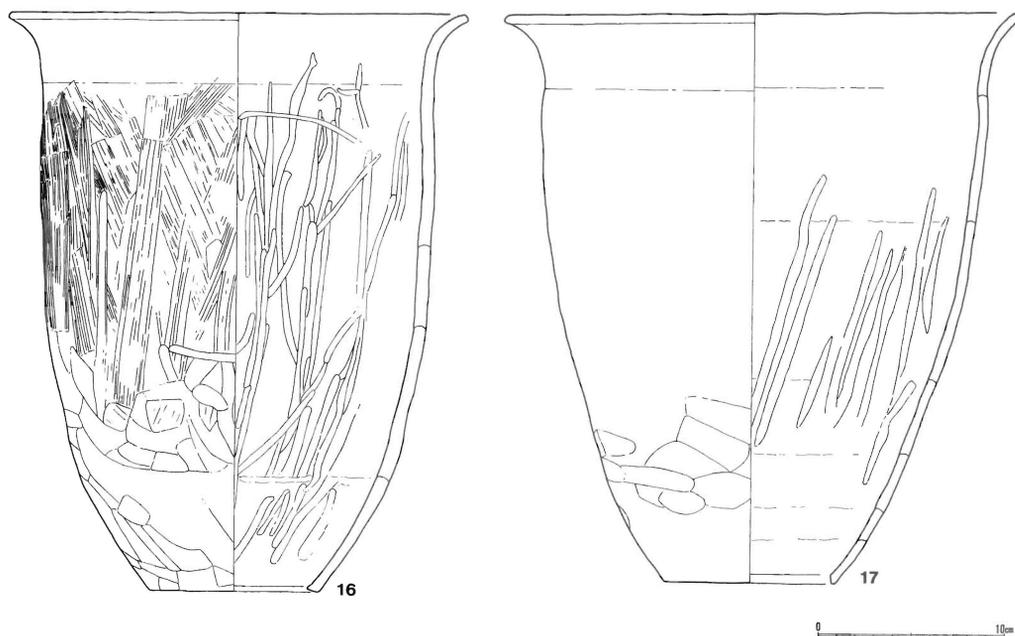
69号住居跡出土遺物 (第13・14図、第26図7)

土師器 坏形土器 (第13図1～8)

1～3は頸部に断面三角形の段をもち、口縁部が直立する。1の口唇部内面には弱い沈線が1条みられる。いずれも内外面黒色処理が施されており、内面及び外面口縁部は横ナデ、外面はナデられるが、1と3の外面には顕著にヘラ削り痕が残る。1～3は北コーナーに配される柱穴南側の床面上からまとまって出土しており、1は5と重なり、伏せてあった(1が下)。いずれも完形で



第13図 69号住居跡出土遺物 1 (1/4)



第14図 69号住居跡出土遺物2 (1/4)

ある。

4は1～3と形態的には同類であるが、黒色処理が施されないものである。内面ヘラナデ、外面はナデられるが、底部には僅かにヘラ削り痕が残る。カマド右側の床面上からの出土で、6と重なっていた(4が下)。完形である。

5は口唇部が僅かに外反し、口唇上には1条の沈線がめぐる。底部はヘラ削りにより平底風に調整されている。内面横ナデ、外面はナデられるが、底部にはヘラ削り痕が残る。北コーナーに配される柱穴南側の床面上の出土、1と重なっていた(5が上)。口縁部を僅かに欠損する程である。

6・7は頸部に稜をもつ碗状のものである。いずれも口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、6の外面底部にはヘラ削り痕が顕著に残る。カマド右側の床面上の出土で6は4と重なっていた(6が上)。6は口縁部を7は底部を僅かに欠損する程度である。

8は平底の底部から立ち上がり、体部にやや膨らみをもち、口縁部が直立する。口縁部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデされる。外面には顕著にヘラ削り痕が残る。西コーナーに配される柱穴の覆土上層からの出土で、口縁部から体部にかけて一部欠損する。3/4程の遺存度である。

土師器高坏形土器 (第13図9・10)

相似た器形の土器である。坏部は頸部に段をもち、口縁部は大きく外反する。脚台部は裾部方向に大きく開き、ラップ状を呈する。坏部は口頸部内外面が横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、横方向のヘラ削り痕が顕著に残る。脚台部は脚柱部外面に縦方向のヘラ削り痕が顕著に残り、内面はヘラナデされる。裾部は内外面横ナデが施される。いずれも坏部の口頸部内外面が赤彩される。9は住居中央付近の床面上の出土で、3/4程の遺存度である。10は北コーナーに配さ

れる柱穴西側の床面上からの出土で、脚台部の裾部を欠損する。

土師器鉢形土器（第13図11・12）

相似た器形の土器である。平底の底部から立ち上がり、頸部に稜をもち、口頸部は外反する。いずれも口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられる。11はカマド前の床面上の出土で、ほぼ完形である。12はカマド右側からまとまって出土したうちの1点である。遺存度は1/2程である。

土師器甕形土器（第13図13～15）

13・14は長甕、15は小型の丸甕である。

13は平底の底部から直線的な筒状の胴部に至り、胴部から頸部への移行はスムーズで、口縁部は外反する。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は胴部上半から中位が縦方向の、下半が斜方向のヘラ削りが施され、その後ナデられる。カマド右側の床面上から正置の状態出土し、遺存度は4/5程である。

14は13に比べかなり短胴のもので、器肉が分厚く、見かけよりも重量のある土器である。口縁部内外面横ナデ、以下内面は横方向のヘラナデ後、縦方向に疎の細長い磨きが施される。外面はナデられるが、ヘラ削り痕が僅かに残る。カマド右側の床面上から、北東壁に倒れかかるような状態で出土した。完形である。

15は平底の底部から球状の胴部に至り、口縁部は外反する。口頸部内外面横ナデ、外面はその後ヘラナデされ、以下内面は横方向のヘラナデ、外面はていねいにナデられる（スリップか）。カマド右側の床面上の出土で、完形である。

土師器甕形土器（第14図16・17）

16は胴部下半にやや膨らみをもち、胴部上半から頸部への移行はスムーズで、口縁部は外反する。底部は筒抜け状を呈する。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ後、縦方向にやや密の細長い磨きが施される。外面は胴部上半から中位にかけて、縦あるいは斜方向にハケ目痕がみられる。このハケ目はおそらくヘラ状工具の先端がささら状を呈しているためについたものであろう。内面のヘラナデもよく観察すると若干ささら状であることから、内外面は基本的にハケナデの類の調整と思われる。外面胴部下半にはヘラ削り痕が顕著に残る。カマド右横の床面上の出土で、1/2強の遺存度である。

17は16よりやや胴部上半から底部にかけてはすぼまり、胴部上半から頸部への移行はやや稜をもち、口頸部は外反し、底部は筒抜け状を呈する。口頸部内外面横ナデ、以下内面は横方向のヘラナデ後、縦方向に粗の磨きが施される。外面はていねいにナデられる（スリップか）が、胴部下半には横方向あるいは斜方位にヘラ削り痕が残る。カマド右側の凸堤上に横たわった状態で出土した。完形である。

土製品（第26図7）

羽口の先端部破片である。現存する部分の長さ3.5 cm・太さ6 cmを測り、中央を直径1.5 cm程の孔が貫通している。羽口はかなりの高熱を受けており、先端部から黄褐色の金属酸化付着物部分・灰褐色ガラス質部分・暗褐色熱変成部分に区別できる。基部そのものの色調は赤褐色を呈する。

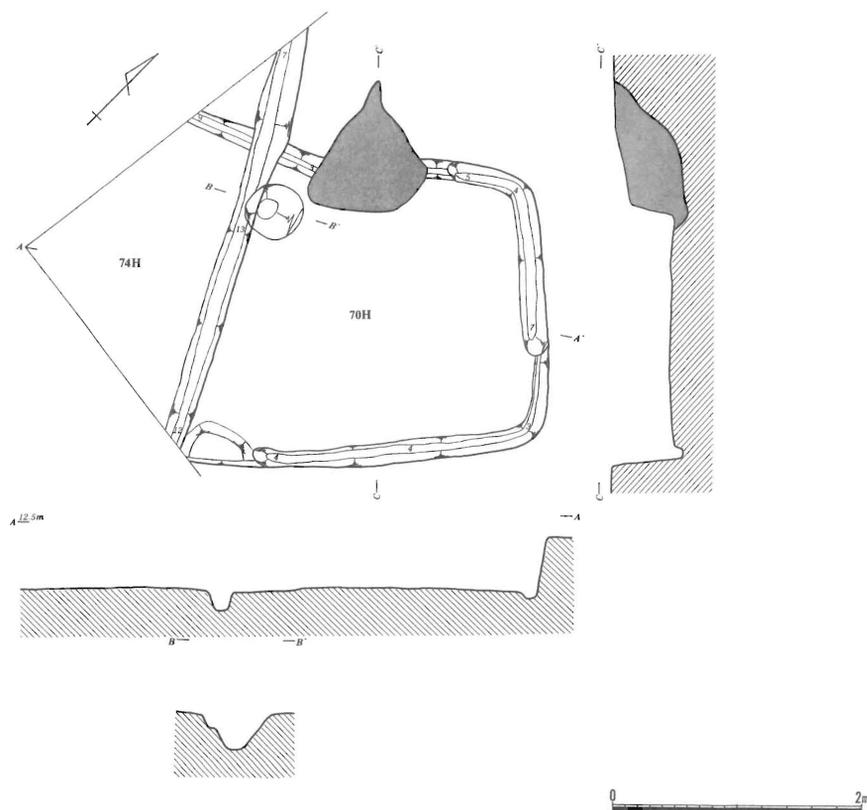
70号住居跡（第15図）

〔住居構造〕74号住居跡に切られる。（平面形）長方形か。（規模）不明×2.42m。（壁高）40～50cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）上幅10～20cm・下幅4～8cm・深さ3～9cmを測り、所々、幅や深さが若干異なる。（床面）住居中央及びカマド前面は、硬く踏み固められている。（カマド）北西壁中央からやや東に偏って位置し、方位はN-40°-W。長さ106cm・幅90cm・壁への掘り込み60cmを測る。比較的に遺存状態が良く、天井部・両袖部には灰褐色粘土が残っている。両袖部はローンを馬蹄形状に隆起させ残し、カマド底面は約50°の角度で住居外の方に向かって立ち上がっている。カマド内部から土製支脚が出土した。（貯蔵穴）カマド左側のピットであろうか。（覆土）焼土粒子・炭化物粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。床面上からは炭化材が検出されている。

〔遺物〕覆土中から土玉、カマド内部から土製支脚が出土したが、土器は小破片が多く、実測できるものがなかった。

〔時期〕鬼高式期。

〔所見〕本住居壁溝上に74号住居跡の貼床が施されていることから、新旧関係は70H→74Hと考えられるが、74号住居跡は70号住居跡の床面精査中に検出されたため、覆土の切り合い関係が把握できなかったことを考えると若干疑問が残る。今後、西側部分の調査が可能であれば解明したい。



第15図 70・74号住居跡（1/60）

70号住居跡出土遺物 (第26図 4・5・8)

土製品 (4・8)

4は土玉である。やや中央からずれた位置に直径0.5 cmの孔が開けられている。孔を開けた面は平坦である。重さ6.8g。

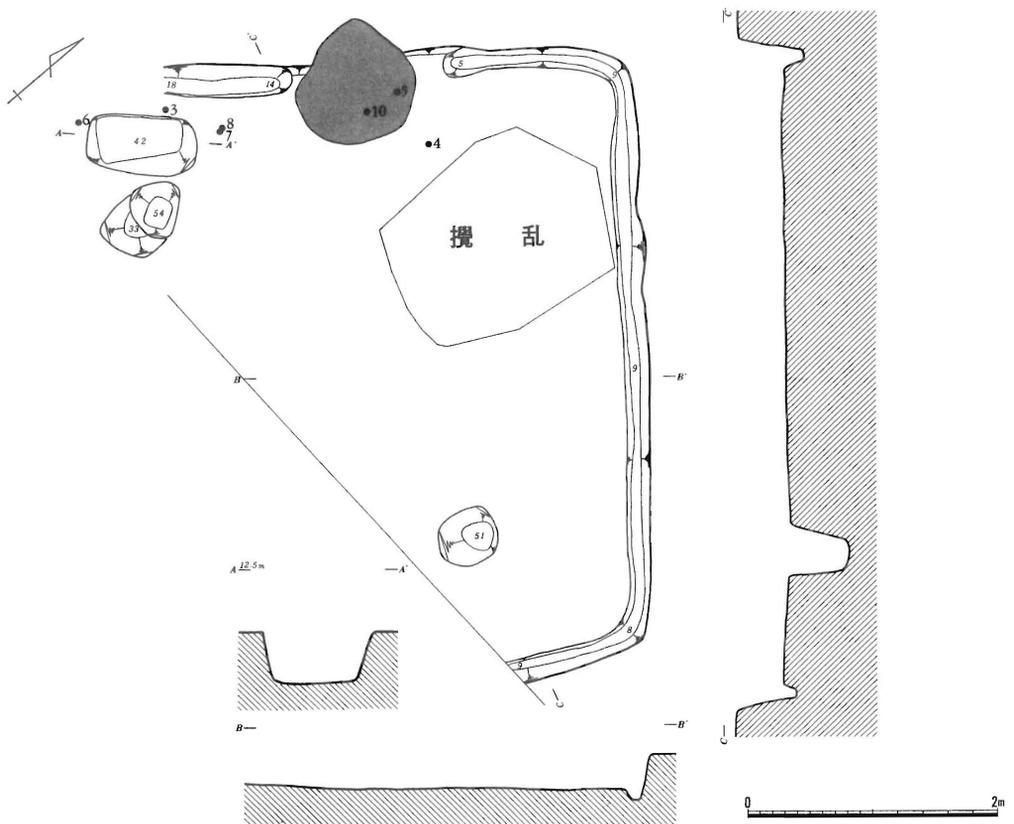
8は支脚である。カマド内部から正置の状態出土した。

鉄製品 (5)

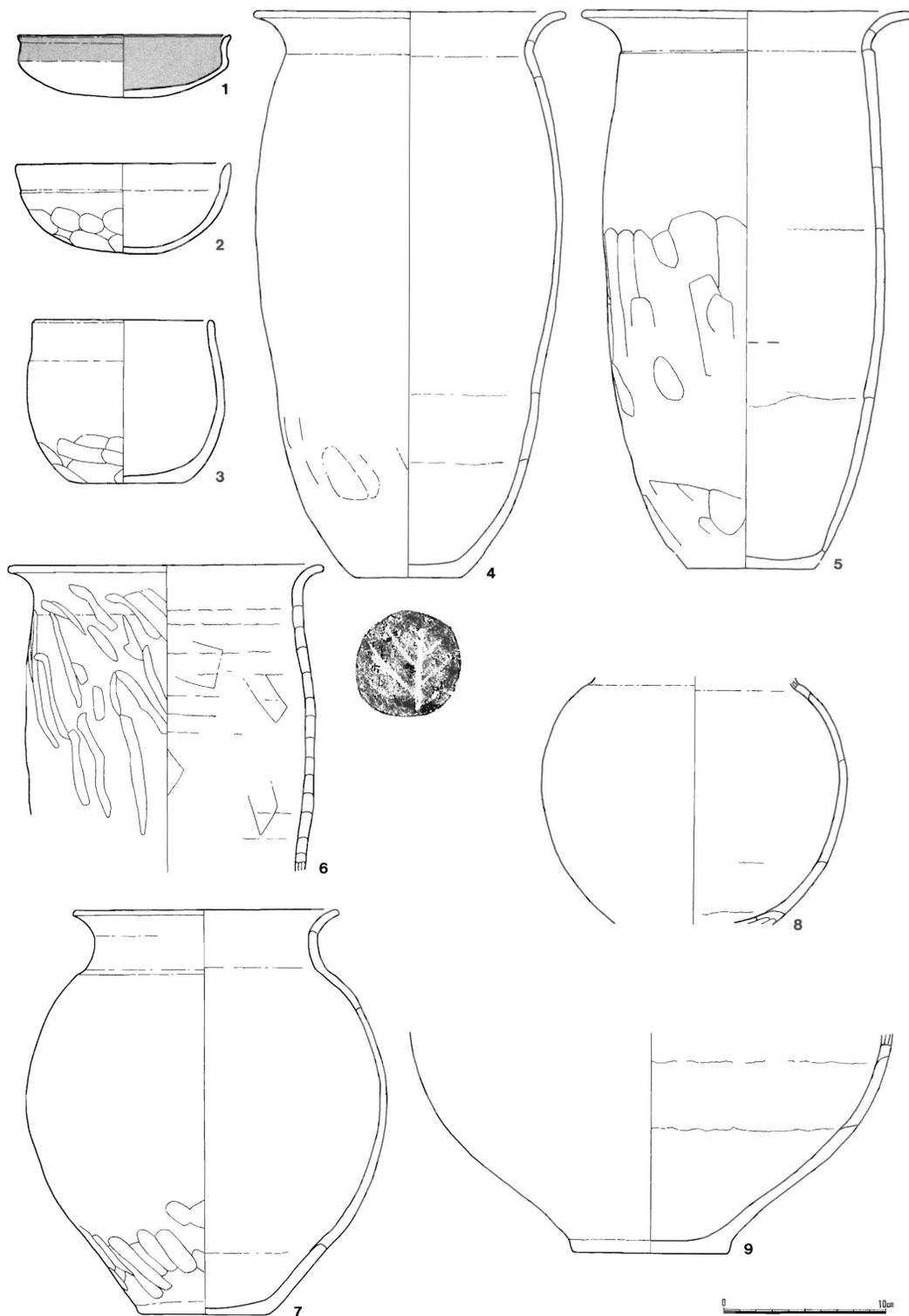
幅1.3 cm、長さ6 cm、厚さ0.2 cmを測る長方形のものである。両端には直径0.3 cmの孔が開けられている。重さ5.3g。

71号住居跡 (第16図)

[住居構造] 72号住居跡を切る。(平面形) 正方形と思われる。(規模) 不明×5.1 m。(壁高) 28~38cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。(壁溝) 確認できる範囲では、上幅13cm・下幅8 cm前後、深さ5~18cmを測り、カマド部分を除いて全周する。(床面) 壁際を除いてほぼ全面硬く踏み固められているが、北コーナーは大きく攪乱を受けている。(カマド) 北西壁ほぼ中央に位置し、方位はN-51°-W。長さ102cm・幅95cm・壁への掘り込み35cmを測り、両袖部はロームを馬蹄形状に隆起させ残し、その上部・天井部に灰褐色粘土を被覆させ構築している。(柱穴) 東・西コーナーの2



第16図 71号住居跡 (1/60)



第17図 71号住居跡出土遺物1 (1/4)

本が検出されたが、支柱穴は四隅に配されるものと考えられる。北コーナーは攪乱により、南コーナーは調査区外のために2本の柱穴は不明である。(貯蔵穴)カマド左側の西コーナーに位置する。平面形は長方形を呈し、88×48cm・深さ42cmを測る。(覆土)ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

[遺物]カマド及び貯蔵穴付近から土器が出土した。

[時期]鬼高式期。

71号住居跡出土遺物 (第17・18図)

土師器坏形土器 (第17図1～3)

1は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に稜をもち、一度内傾し、口縁部は外反する。内面口唇部直下に幅1mmの細い沈線がまわる。口頸部内外面横ナデ、以下内面はナデ、外面はヘラナデされる。内面及び外面口頸部は赤彩される。覆土中の出土で、遺存度は1/2強である。

2は丸底の底部から内湾しながら立ち上がり、頸部に明瞭な稜をもち、口頸部は外傾する。口頸部内外面横ナデ、以下内外面ナデられるが、外面底部にはヘラ削り痕が残る。貯蔵穴の覆土中からの出土で、遺存度は1/2程である。

3は器高の高い土器である。平底の底部から立ち上がり、やや膨らみをもつ体部に至り、口縁部は直立する。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はていねいにナデられるが、底部にはヘラ削り痕が僅かに残る。貯蔵穴付近の床面上の出土で、完形である。

土師器甕形土器 (第17図4～9)

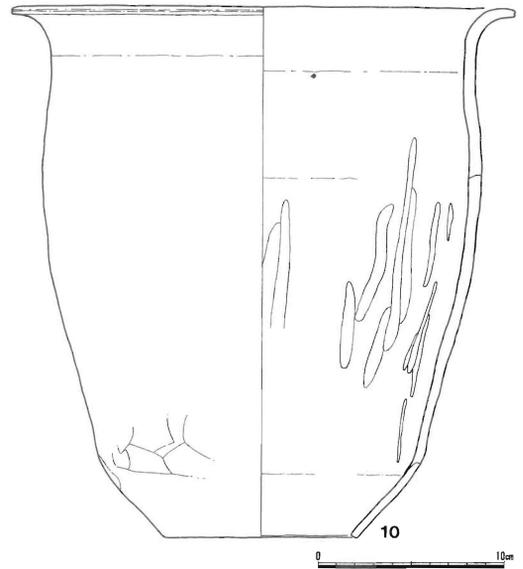
4～6は長甕、7～9は丸甕である。

4は胴部中位がやや膨らみ、頸部に稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はていねいにナデられるが、胴部下半には僅かにヘラ削り痕が残る。底面には木葉痕がみられる。カマド前面の床面上の出土で、遺存度は2/3程である。

5は底部を欠損する。4に比べ胴部が直線的で、頸部に明瞭な稜をもち、最大径を口縁部に測る。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、胴部下半にはヘラ削り痕が残る。カマド中右袖からの出土で、遺存度は3/4程である。

6は胴部下半を欠損する。胴部は直線的で、胴部上半から頸部への移行はスムーズである。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、その後斜方向に細長い磨きを加えられる。貯蔵穴付近の床面上からの倒置した状態で出土した。胴部下半以上は完形である。

7は小型甕で、胴部中位に最大径を測り、口頸部は外反する。特に、胴部下半が丸味をもたずにスリムである点に特徴がある。貯蔵穴付近の床面からの出土で、遺存度は2/3程である。



第18図 71号住居跡出土遺物2 (1/4)

8は口頸部と底部を欠損する。胴部はほぼ球状を呈する。胴部内面はヘラナデ、外面はナデられる。貯蔵穴付近の床面上からの出土で、胴部を2/3程遺存する。

9は大型甕で、胴部下半のみを2/3程遺存する。内面はヘラナデ、外面はナデられる。カマド及び覆土中から破片で出土している。

土師器甑形土器（第18図）

胴部から頸部への移行はスムーズで、口縁部は外反する。最大径は口縁部に測り、底部は筒抜け状を呈する。口頸部内外面横ナデ、以下内面はヘラナデされるが、その後縦方向に細長い磨きはやや粗く施される。外面はナデられるが、胴部下半には斜方向のヘラ削り痕が残る。カマド内からの出土で、遺存度は1/3強である。

72号住居跡（第19図）

〔住居構造〕65号土坑を切り、71・73号住居跡・61～64号土坑に切られる。（平面形）正方形。（規模）4.90×4.82m。（主軸方位）N-44°-W。（壁高）比較的遺存の良い南西壁で44cmを測る。（床面）住居中央に硬化部分を残すが、73号住居跡の床面レベルとの比高差がほとんどないために、明確に両住居の境界が判別できなかった。掘り方は壁際30cm程の範囲が若干窪んでいる。（炉）住居中央よりやや北西に偏って位置する。形態は直径28cmの円形を呈し、床への掘り込みは僅かである。

（貯蔵穴）住居東コーナーに位置する。平面形は不整形を呈し、66×64cm・深さ55cmを測る。（覆土）上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層は焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

〔遺物〕覆土中・床面上から土器が僅かに出土した。

〔時期〕和泉式期。

72号住居跡出土遺物（第20図、第26図6）

土師器碗形土器（第20図1・2）

1は頸部が「く」字状に屈曲し、底部が上げ底風を呈する小型碗である。口頸部内外面は横ナデされるが、内面はハケ状工具によるものであろう。図示はしていないが僅かにハケ目痕が残る。以下内面はヘラナデ、その後やや雑に暗文が施される。外面はヘラ削り後、ヘラナデが施され光沢をおびる。南西壁に近い床面上の出土で、口縁部を僅かに欠損するがほぼ完形である。

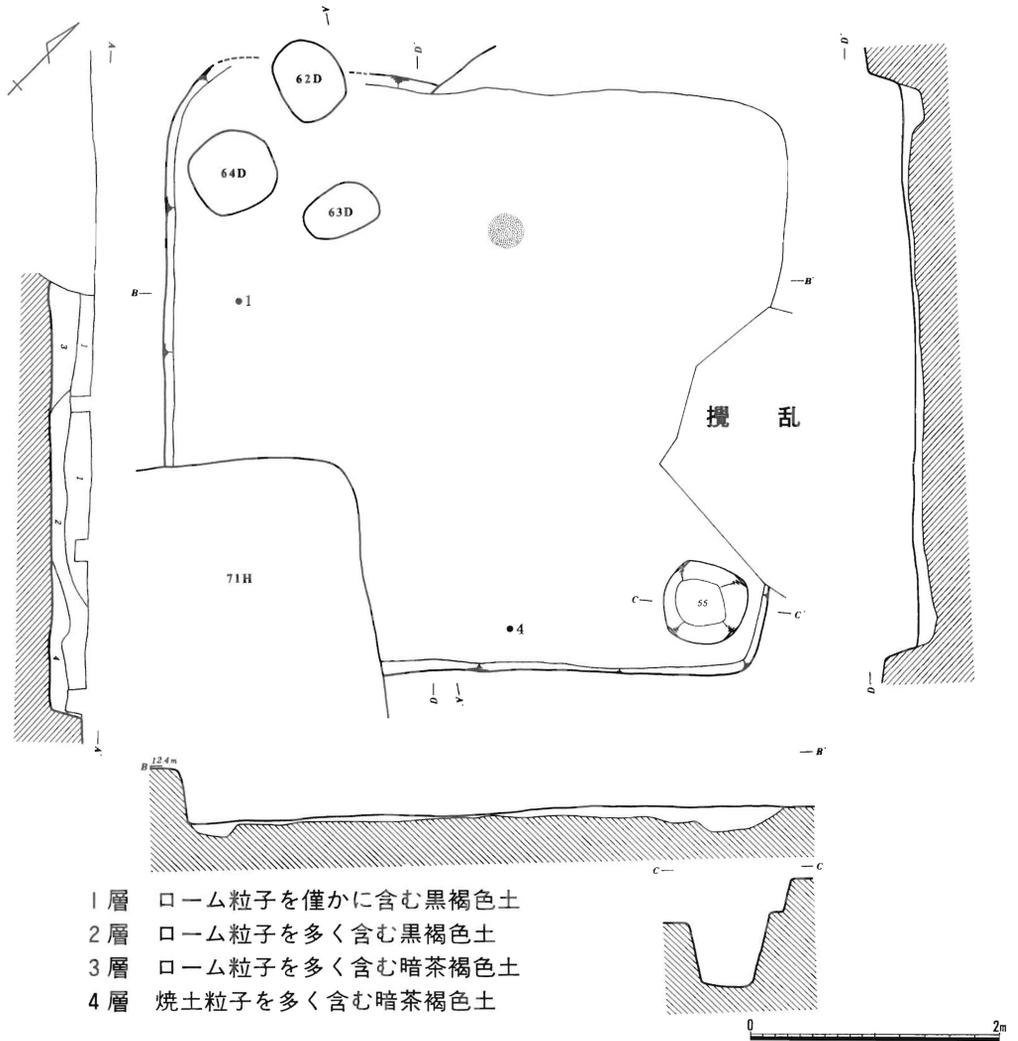
2は体部上半でややくびれ、口縁部は内湾ぎみに外傾し、内外面赤彩される。胎土中には小石を多く含む。口縁部内外面は横ナデ、以下ナデられるが、内面にはその後斜方向に暗文が施される。貯蔵穴内からの出土で、遺存度は1/4程である。

土師器高坏形土器（3・4）

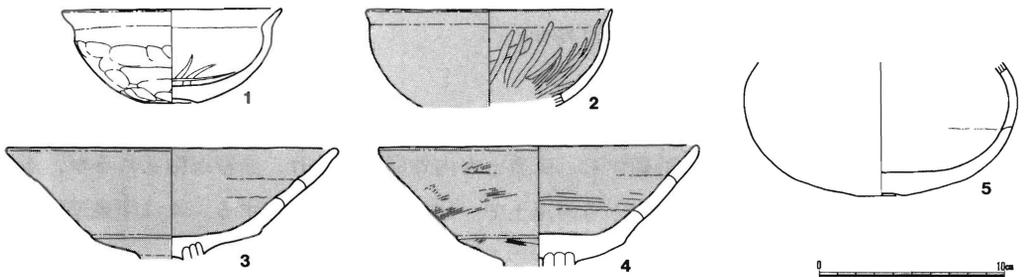
3・4とも脚台部を欠損する。坏部は3・4とも相似た器形の土器で、底部と口縁部の境には明瞭な段をもち、口縁部は直線的に外傾する。両者とも内外面ナデられ、赤彩が施されるが、4には僅かにハケ目痕が残る。3は貯蔵穴内からの出土で、坏部を2/3程遺存する。4は南東壁に近い床面上からの出土で、口縁部を一部欠損する程度である。

土師器埴形土器（5）

上げ底風を呈する小さな底部と算盤玉状の体部をもつ。内外面ともナデられると思われるが、外



第19図 72号住居跡 (1/60)



第20図 72号住居跡出土遺物 (1/4)

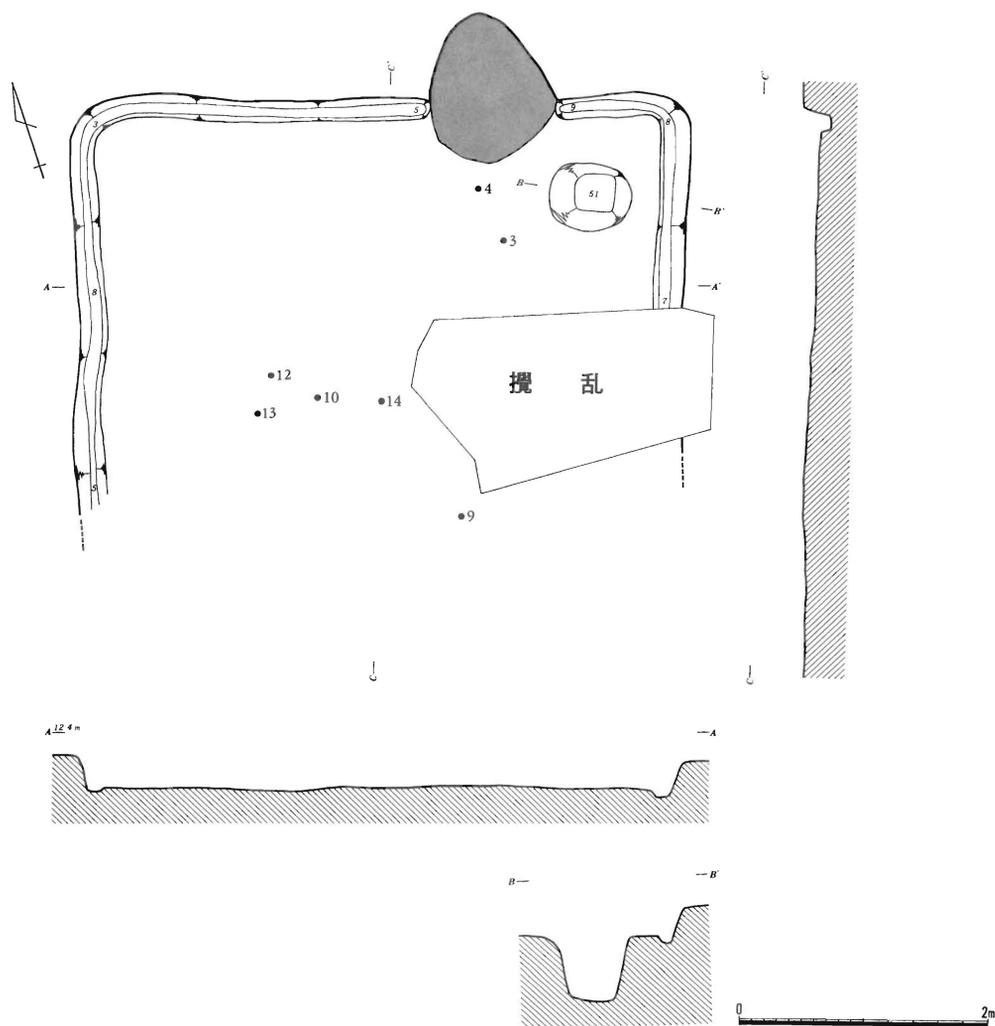
面については器面が荒れているため、よく観察できない。また、外面は赤彩が施される可能性がある。貯蔵穴内からの出土で、体部上半以下を1/2強遺存する。

鉄製品（第26図6）

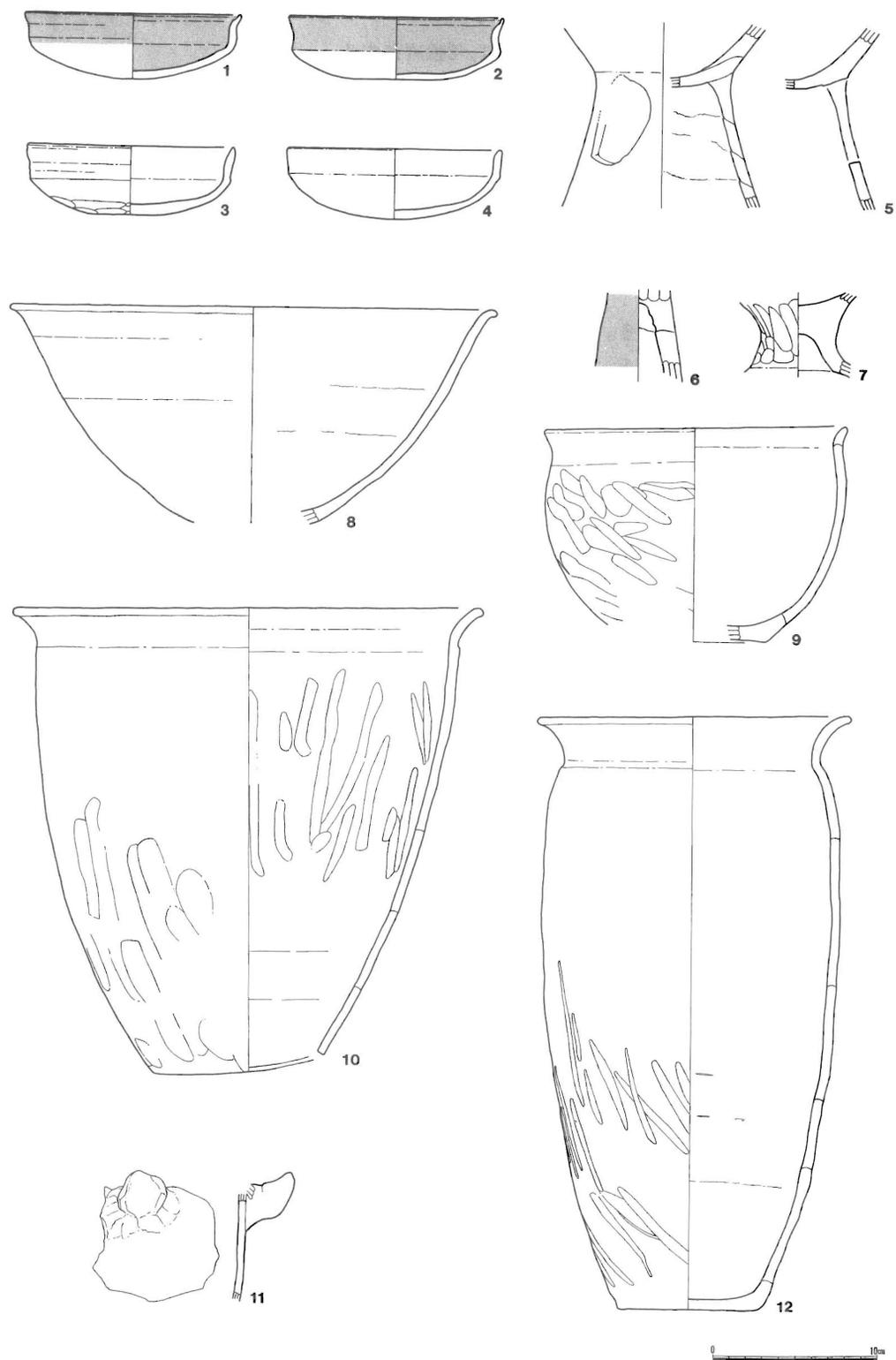
小破片であるため詳細不明であるが、器の口縁部であろうか、口縁端部と思われる部分は、内面直下で肥厚しており、外面には2条の沈線がみられる。覆土中の出土で、混入したものとも考えられる。

73号住居跡（第21図）

〔住居構造〕72号住居跡を切る。（平面形）正方形と思われる。（規模）不明×4.88m。（壁高）15～20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）南側については、72号住居跡の貼床中にあると思われるが、確認できなかった。上幅15cm・下幅8cm前後、深さ3～9cmを測る。（床面）住居中



第21図 73号住居跡 (1/60)



第22図 73号住居跡出土遺物1 (1/4)

中央付近及びカマド前面に硬化部分がみられるが、72号住居跡の床面レベルとの比高差がないため、明確に両住居の境界が判別できなかった。(カマド)北壁中央からやや東に偏って位置し、方位はN-15°-E。長さ120cm・幅102cm・壁への掘り込み62cmを測り、両袖部・天井部は灰褐色粘土で被覆させ構築している。カマド底面は単純に椀状を呈しているのみで、両袖部には馬蹄形状にロームを残していない。(貯蔵穴)カマド右側の北東コーナーに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、66×54cm・深さ51cmを測る。(覆土)焼土粒子・炭化物粒子を多く含む黒褐色土を基調とする。床面上からは炭化材が検出された。

[遺物]住居中央及びカマド前面の床面上から、土器が比較的まとまって出土した。

[時期]鬼高式期。

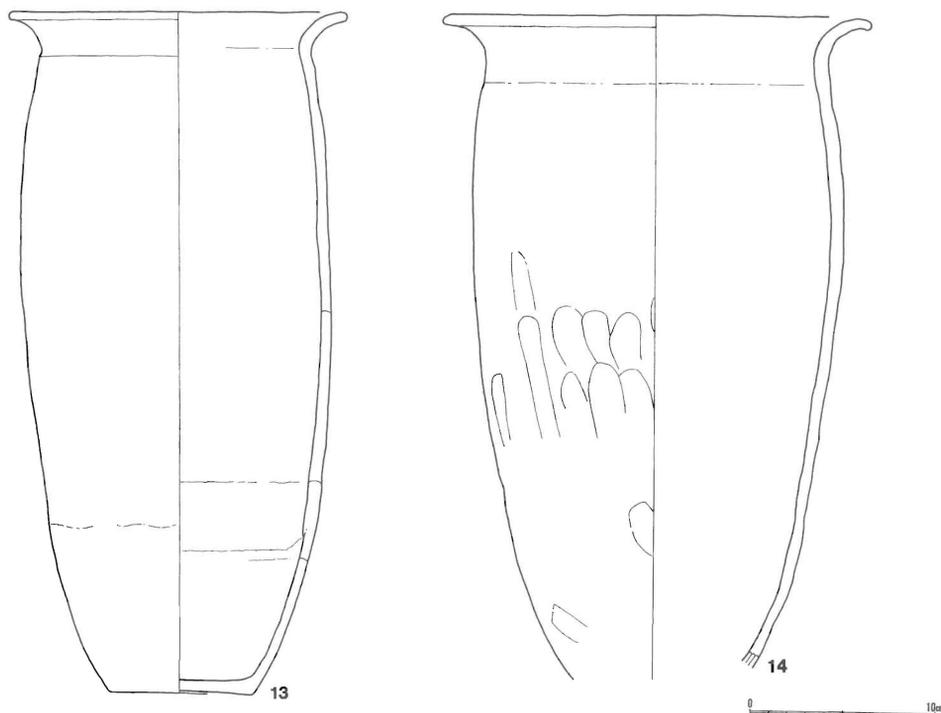
[所見]床面上から炭化材が検出されたことから、焼失住居と考えられる。

73号住居跡出土遺物(第22・23図、第26図3)

土師器 坏形土器(第22図1~4)

1・2は相似た器形の土器である。丸底の底部と頸部との境に稜を有し、頸部はやや内傾し、口縁部は短く外反する。口唇部内面直下には1条の沈線がまわる。胎土中には小石が多く含まれる。口頸部内外面は横ナデ、以下ナデられ、内面及び口頸部は赤彩される。ともに覆土中の出土で、遺存度は1/3程である。

3は頸部にやや弱い段を有し、口縁部に2・3本の稜をもつ。口頸部内外面は横ナデ、以下ナデられるが、外面には僅かにヘラ削り痕が残る。カマド前面の床面上の出土で、遺存度は2/3程で



第23図 73号住居跡出土遺物2(1/4)

ある。

4は頸部に断面三角形のやや弱い段を有し、口縁部は直立する。口頸部内外面横ナデ、以下ナデられる。カマド前面の床面上の出土で、遺存度は2/3程である。

土師器高環形土器（5～7）

すべて脚台部破片であるが、5・7の土器は異例である。

5は脚柱部上半に楕円形状の窓が開けられている。内外面ナデられるが、内面には輪積み痕が顕著に残る。覆土中の出土である。

6は直線的な柱状を呈し、僅かに裾部に向かって「ハ」字状に開く。内面はヘラ削り、外面はナデられ、赤彩が施される。覆土中の出土で、混入の可能性もある。

7は坯部と脚台部の間が分厚く、脚台部は下端で横ナデの調整痕がみられることから裾部はそれ程長く伸びないものと思われる。内外面ヘラ削り痕が残る。覆土中の出土である。

土師器鉢形土器（8・9）

8は底部を欠損する。底部から口縁部にかけてゆるやかに内湾ぎみに開き、口縁部は短く外反する。口縁部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられる。覆土中の出土で、遺存度は1/3程である。

9は平底の底部をもち、体部は碗状を呈し、口縁部は僅かに外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面は斜方向に細長い磨きが施され光沢をおびる。底面には木葉痕がみられる。住居南寄りの床面上の出土で、底部を2/3程欠損する。

土師器甑形土器（10・11）

10は頸部に明瞭な稜をもち、口縁部が外反し、底部は筒抜け状を呈する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はていねいにヘラナデされた後、縦方向に細長い磨きがやや粗く施される。外面はナデられるが、僅かにヘラ削り痕が残る。住居中央付近の床面上の出土で、遺存度は4/5強である。

11は把手部分の破片である。把手は親指状を呈し、上方を向いており、貼付けした様子が観察できる。本地での出土は初めてである。

土師器甕形土器（12～14）

すべて長甕であり、口縁部に最大径を測る。

12は直線的に細長い胴部を呈するが、やや胴部上半で膨らみをもち、頸部との境に明瞭な段を有する。口縁部は外反し、口唇部は折り返し状にやや丸くめくれている。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はていねいなナデ後、胴部下半に斜方向の細長い磨きが施される。底面には木葉痕がみられる。住居中央付近の床面上の出土で、遺存度は4/5強である。

13は直線的に細長い胴部から頸部への移行には稜をもち、口縁部は外反する。口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられる。底面には木葉痕がみられる。住居中央付近の床面上の出土で、遺存度は3/4程である。

14は12・13に比べやや太身の土器、口頸部内外面は横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はナデられるが、ヘラ削り痕を僅かに残す。住居中央付近の床面上の出土で、底部を欠損する以外はほぼ完形である。

土製品 (第26図3)

紡錘車である。断面は台形を呈し、中央を直径0.6 cmの孔が開けられている。表面には磨きが施されず、指紋痕が残っていることから、手でこねて作られただけのものであろう。重さ21.3g。

75号住居跡 (第24図)

〔住居構造〕住居南東コーナー付近のみの検出で、大部分は調査区外にあるものと考えられる。(壁高)比較的に遺存状態の良い南壁で44cmを測る。(壁溝)確認できる範囲では、カマド部分を除いて全周する。上幅16~20cm、下幅8~12cm、深さ10~13cmを測る。(床面)カマド前面に硬化部分が残る。(カマド)東壁に位置する。非常に遺存状態が悪く、灰褐色粘土は両袖部に若干残る程度である。(覆土)1層-表土。2層-ローム粒子を僅かに含む暗褐色土。3層-ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子を僅かに含む黒褐色土。4層-ローム粒子を含む褐色土。5層-ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。6層-ローム粒子を多く含む暗茶褐色土。

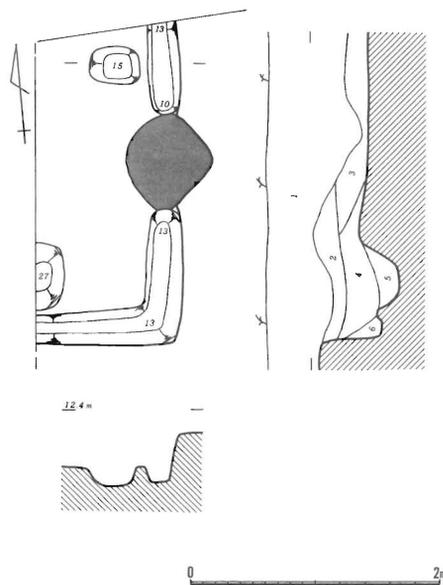
〔遺物〕カマド前面の床面上から土器が出土した。

〔時期〕鬼高式期。

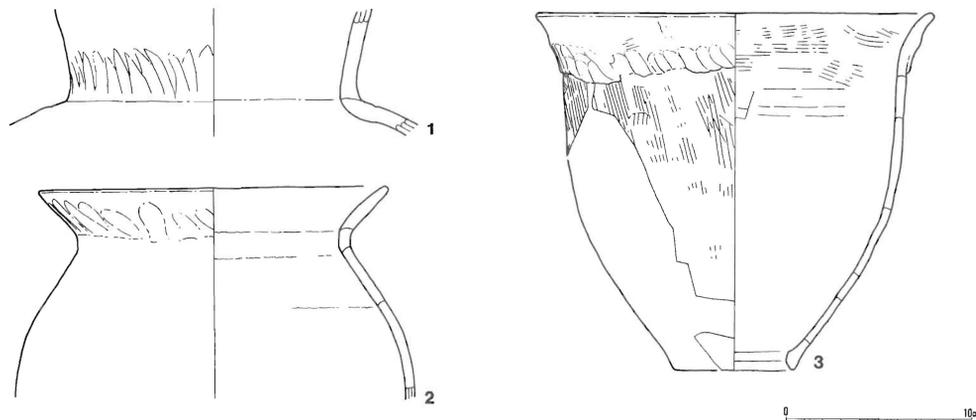
〔所見〕東壁・南壁寄りに2本のピットが検出されたが、貯蔵穴とするには前者は規模的に、後者は位置的に若干疑問が残る。

75号住居跡出土遺物 (第25図)

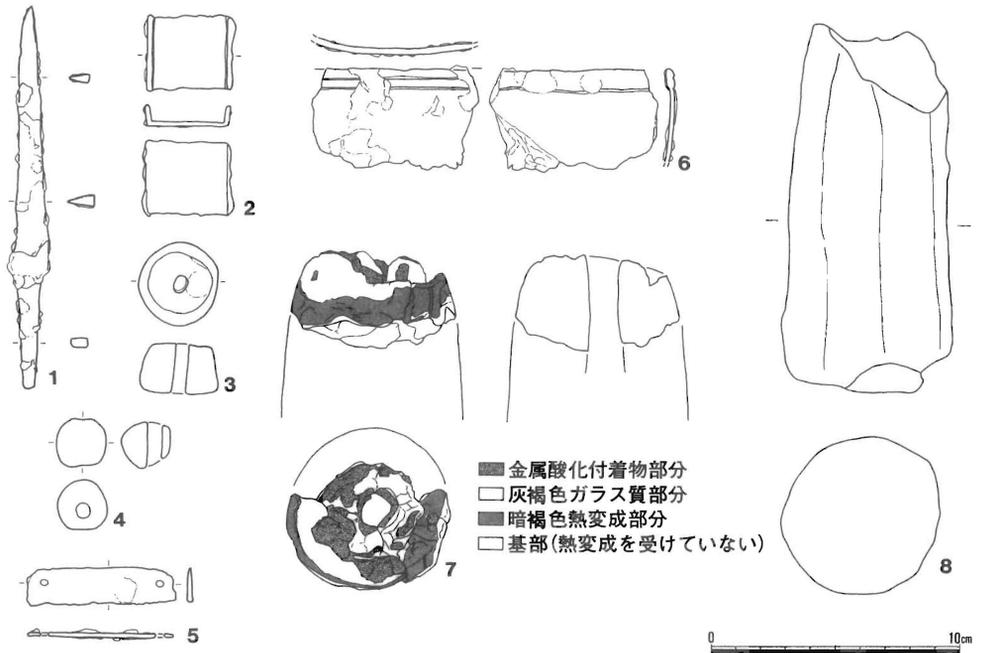
すべて土師器である。



第24図 75号住居跡 (1/60)



第25図 75号住居跡出土遺物 (1/4)



第26図 住居跡出土土製品・鉄製品 (1/3)

1は壺形土器の肩部から頸部の破片である。器面が摩耗しているため、調整痕についてはよく観察できない。色調は全体的に赤褐色を呈していることから、赤彩されていた可能性がある。

2は球状の胴部と「く」字状の頸部をもつ甕形土器である。器厚は非常に薄い。内外面ともにスリップがかけられているのか器面が薄ぼんやりとした感じである。口縁部から胴部中位にかけて、1/3程遺存する。

3は小型の甕形土器である。口縁部に最大径を測り、胴部は中位でやや膨らみをもち、底部に向かってゆるやかにすぼまる。口縁部は粘土をひだ状に貼付けることにより複合口縁を作出している。内面は口縁部がハケ目調整、以下ヘラナデが施される。外面は口縁部が横ナデ、以下は縦方向にハケ目調整が施されるが、胴部下半はナデ(スリップか)によりハケ目痕を若干消している。遺存度は1/3程である。

(2) 土坑

61号土坑 (第27図)

〔構造〕 (平面形) 「凸」字状を呈する。(規模) 南北 170 cm・東西 208 cmを測る。(深さ) 40～50 cm。(覆土) ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に近い。検出された2本のピットについては、伴うかどうか不明である。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 覆土から観察して歴史時代(中・近世)のものと思われる。

62号土坑（第27図）

〔構造〕72号住居跡を切る。（平面形）楕円形。（規模）66×50cm。（深さ）最深で56cm。（長軸方位）N-81°-W。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。形態的にはピット状を呈するが、一応土坑として取扱った。

〔遺物〕なし。

〔時期〕覆土から観察して歴史時代（中・近世）のものと思われる。

63号土坑（第27図）

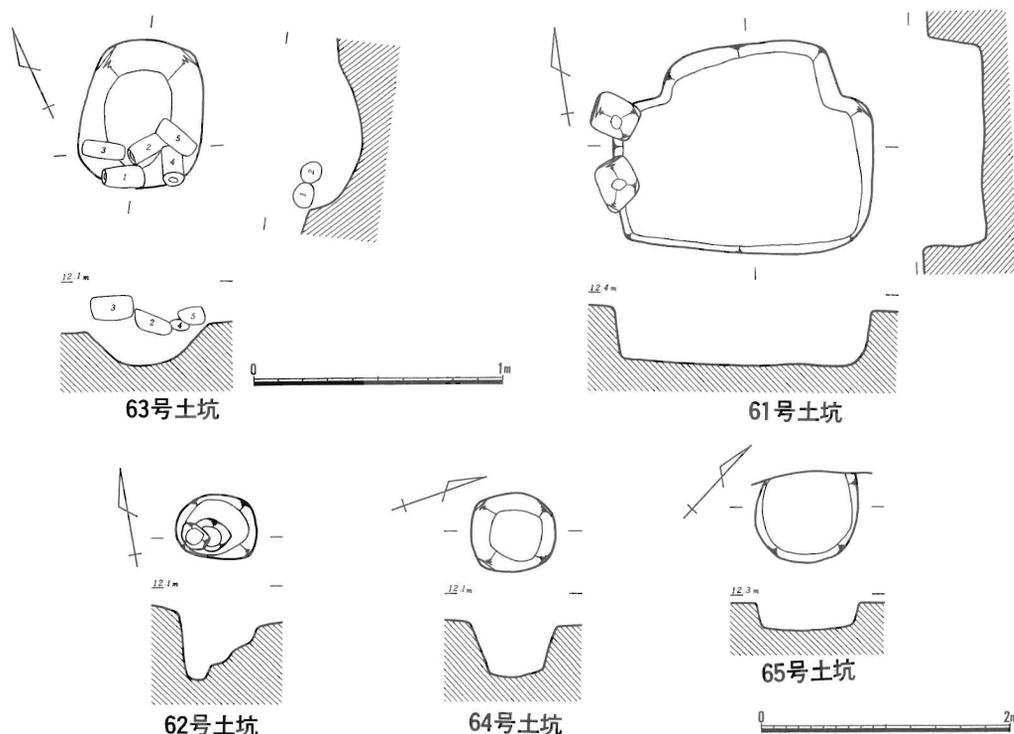
〔構造〕72号住居跡を切り、62号土坑に切られる。（平面形）楕円形。（規模）120×96cm。（深さ）25cm。ただし、72号住居跡覆土中から本土坑の覆土が観察されていることから、さらに40cm程深い掘り込みであったと考えられる。同時に規模についても、さらに大きくなる。〔長軸方位〕N-32°-E。（覆土）ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土を基調とする。断面形は椀状を呈する。

〔遺物〕円柱状の土製品が5個一括して出土した。

〔時期〕本土坑は72号住居跡を切っていることから、構築時期の上限は古墳時代中期とすることができるが、下限については不明である。

63号土坑出土遺物（第28図）

中央に孔が貫通する円柱形状の土製品である。特徴としては、上面より下面の方がやや大きく、



第27図 土坑（61・62・64・65号土坑=1/60、63号土坑=1/30）

さらに上面は丸く仕上げられており、下面は平坦に作られている。中央の孔についても形状と同様に下面にいくにつれて大きくなっている。この特徴は、上下を意識しての差なのであろうか。

色調は1が赤褐色を呈する他はすべて黒褐色を呈し、全体として焼きがあまく、もろい感じを受ける。胎土には砂粒・小石が多く含まれている。

1は上面径5.5cm、下面径8cm、長さ16.2cm、重さ1.12kg。

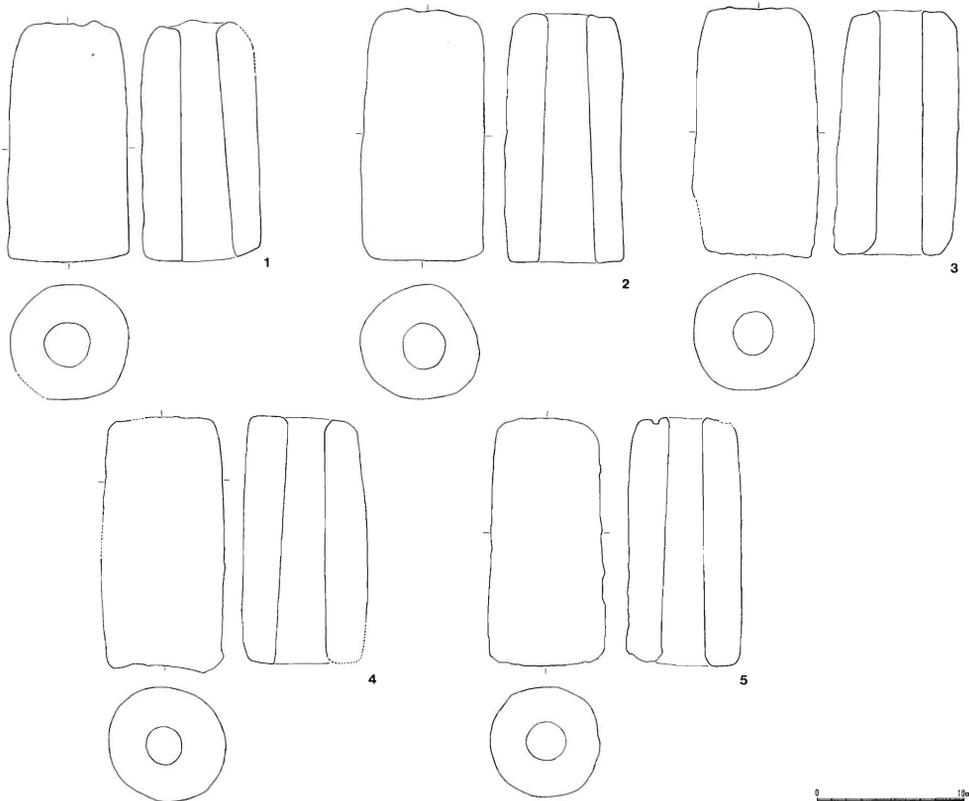
2は上面径6cm、下面径7.5cm、長さ17.1cm、重さ1.21kg。

3は上面径6.2cm、下面径7.2cm、長さ15.9cm、重さ1.15kg。

4は上面径6.6cm、下面径7cm、長さ17.4cm、重さ1.14kg。

5は上面径5.7cm、下面径7.3cm、長さ16.8cm、重さ1.11kg。

〔所見〕調査当初、5個の土製品は72号住居跡の床面レベルから出土したため、72号住居跡に伴うものと考えていた。しかし、偶然に72号住居跡のA-A'間の土層堆積状態を観察できたことから、これらは72号住居跡を掘り込んで構築された土坑内の出土であることが判明した。出土状態は5個ともに南寄りに偏って出土しており、坑底面上25cmに位置する。また、覆土中にはローム小ブロックを含んでおり、人為的に埋戻された可能性がある。このことから、土製品はかなり一括性を有し、個々に使用持続期間があったものとは思えない。おそらく、5個1組（5個以上であるかもしれない）として使用され、それらが不用あるいは機能しなくなった後、土坑内に廃棄または丁重に埋納



第28図 63号土坑出土遺物 (1/5)

されたのであろう。

これらの土製品については、寡聞にして類例を知らないために、先学の諸氏からご教示願えれば幸いである。

64号土坑（第27図）

〔構造〕 72号住居跡を切る。（平面形）円形。（規模）68×64cm。（深さ）44cm。（覆土）ロームブロックを多く含む暗褐色土を基調とする。壁は急斜に立ち上がる。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 覆土から観察して歴史時代（中・近世）のものと思われる。

65号土坑（第27図）

〔構造〕 72号住居跡に切られる。（平面形）円形と思われる。（規模）不明×82cm。（深さ）22cm。（覆土）ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。断面形はタライ状を呈する。

〔遺物〕 なし。

〔時期〕 覆土から観察して縄文時代のものと思われる。

第3節 ま と め

城山遺跡第7・9地点の発掘調査は、両地点を併わせても約200㎡と狭小な面積であったが、古墳時代中期の住居跡1軒・後期の住居跡6軒、平安時代の住居跡1軒など住居跡では計9軒も検出され、第1地点の南側においても、集落が密集していることが判明した。ここでは、古墳時代の住居跡から出土した土器について若干検討することにする。

古墳時代中期

市内でのいわゆる和泉式期の住居跡の検出例は、まだ城山遺跡11・57号住居跡の2軒のみであり、今回の72号住居跡を含めても3軒にすぎない。

〈72号住居跡出土土器〉

1は頸部が「く」字状に屈曲し、上げ底風を呈する小型埴である。埴形土器から派生したものと考えられる。2はいわゆる内斜口縁埴と呼ばれるもので、内面には放射状の細長い暗文がみられる。

3・4は高埴形土器で、埴部下端に段をもち、口縁部が直線的に外傾するものである。

5は算盤玉状の胴部と上げ底風の小さな底部をもつ埴形土器である。本遺跡11Hに類例がある。

以上、本遺跡は5世紀中葉の所産のものと考えられる。

古墳時代後期

いわゆる鬼高式期になると、市内では田子山・中野・中道遺跡という城山周辺地域での検出例がみられるようになる。中でも中野遺跡3号住居跡は、市内で最も古いカマドをもつ住居で5世紀後半まで崩る可能性がある。現在のところ、城山・中野遺跡を中心として該期の古い住居跡が検出されている。

〈69号住居跡出土土器〉

本遺跡における環形土器は、基本的に6世紀中葉まで赤彩土器が主流をなしていたが、後半から赤彩土器はいわゆる比企型環に限定され、その主流は無彩土器に代わる。しかし、その傍ら黒彩土器が6世紀前半頃から使用されており、以後“赤”と“黒”が色彩感覚において対称的な存在として目に映る。

本住居跡出土の環形土器の特徴は、赤彩土器に代わって1～3の黒色土器が存在することにある。黒色土器は口径12cm強を測り、頸部に断面三角形の段をもつ有段環である。4は1～3と全く同じ形態を呈しているものの、黒色処理が施されないものであり、本遺跡40H-2に類似がある。5は口唇上に弱い1条の沈線がまわるもので、形態的には陶邑編年のⅡ型式3段階の須恵器環蓋に類似する。8は粗製の土器である。環形土器については、全体的に法量の矮小化が明確になり、無彩土器が主流をなす段階である城山遺跡Ⅴ～Ⅵ期に比定されよう。

高環形土器は、口径12cm前後を測り、底部と口縁部の境に段をもつ赤彩土器であり、市内での出土は初めてであるが、小ぶりの坏部と短い脚台部から、6世紀末葉以降の特徴といえる。

甕形土器は、長胴のものと小型の球胴のものがある。前者は口縁部が大きく外反し、胴部が直線的なものである。後者は本遺跡19Hのものに比べ、底部がまだ小さくなく、頸部の調整技法が1H-23の土器に類似することから、城山遺跡Ⅴ期に比定されよう。

甌形土器は、口縁部・胴部形態の特徴や内面にみられる間隔の疎な細長い磨きから、城山遺跡Ⅴ期に比定される。

〈71号住居跡出土土器〉

環形土器は3点出土しており、1はいわゆる比企型環で、口径は13cmを測る。2は頸部に稜をもつやや器高の高い碗状のものである。城山遺跡Ⅴ期に比定される。

甕形土器は、長胴のものと球胴のものがあり、前者は口縁部が非常に発達し大きく外反し、胴部は直線的なものである。4は底部に木葉痕を残す。後者は小型と大型に区別できるが、7は胴部下半がスリムであり、該期では異例である。甕形土器にみられる木葉痕については、1・3H出土のものからは皆無であり、19・42Hなどの後出するものにみられ、さらに最新の48Hからはみられないことから、城山遺跡Ⅴ期の新しい段階からⅥ期までという比較的限られた段階に残るものと考えられる。全体的に城山遺跡Ⅴ期の新しい段階に比定される。

甌形土器は、内面にみられる間隔の疎な細長い磨きや粗雑な成形から、城山遺跡Ⅴ期の新しい段階に比定される。

〈73号住居跡出土土器〉

環形土器は4点出土しており、1・2はいわゆる比企型環で、口径は13cmを測る。3はかなり粗雑観はあるものの、いわゆる模倣環の系譜にあるものであろう。4の器形は69H-1～4に類似するものである。城山遺跡Ⅴ期に比定される。

甕形土器は、長胴甕が出土しており、概して胴部上半に膨らみをもち、頸部に明瞭な段を有するもので、69・71Hより後出するタイプと考えられる。12・13は底部に木葉痕を残す。城山遺跡Ⅴ～Ⅵ期に比定されよう。

甗形土器は、内面にみられる間隔の粗い細長い磨きや粗雑な成形から、城山遺跡Ⅴ期の新しい段階に比定される。

〈75号住居跡出土土器〉

1は肩部をもつことから壺形土器と考えられる。

2は甗形土器。球状の胴部と「く」字状の頸部をもつ、いわゆる和泉式の特徴をもつ。類例に11H-6がある。

3は小型の甗形土器。口縁部は複合口縁を呈し、器面にはハケ目痕を顕著に残すものである。

以上、69・71・73Hは大まかに城山遺跡Ⅴ期の新しい段階に比定されることから、おおよそ6世紀末葉から7世紀初頭の所産でも7世紀初頭に近い様相を呈しているものと考えられる。

75Hは壺形土器や頸部が「く」字状を呈する甗形土器などの特徴から、中野遺跡3号住居跡よりも古くなる可能性がある。5世紀後半の所産であろう。

〔引用・参考文献〕

佐々木保俊 1987『城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書』志木市の文化財第11集

佐々木保俊・尾形則敏 1985『西原大塚遺跡第3地点 中野遺跡第2地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第1集

1987『新邸遺跡策2地点 西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第3集

1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集

1989『志木市遺跡群Ⅰ』志木市の文化財第13集

1990『志木市遺跡群Ⅱ』志木市の文化財第14集

志木市史編さん室 1984『志木市史 原始・古代資料編』

1986『志木市史 中世資料編』

谷井 彪・宮野和明他 1975『西原大塚遺跡発掘調査報告』志木市の文化財第4集

中村 浩 1981『和泉陶邑の研究』柏書房

比田井克人 1988「南関東五世紀土器考」『史館』第20号

図 版



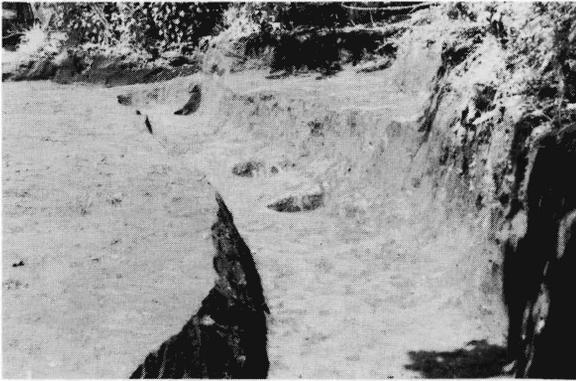
調査区近景



発掘風景



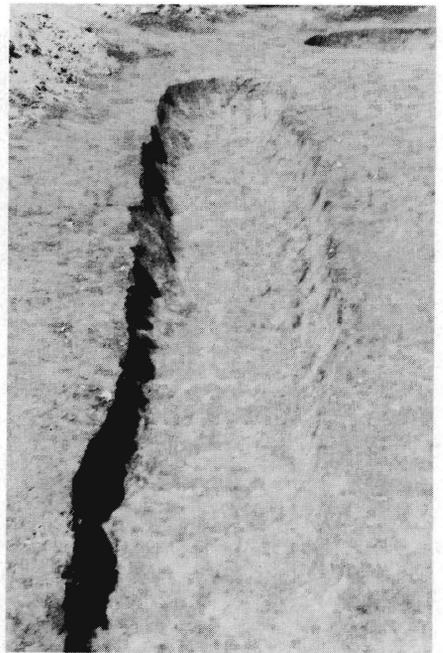
2号方形周溝墓



東 溝



北 溝



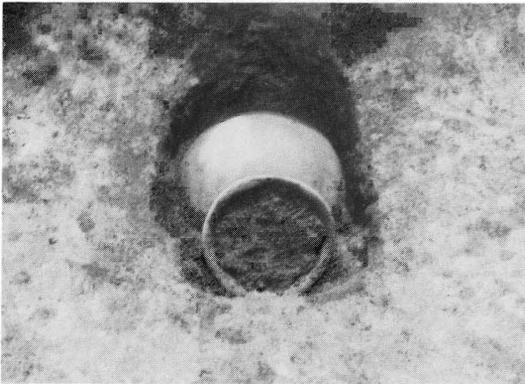
西 溝



2号方形周溝墓遺物出土状態



1号壺棺出土状態



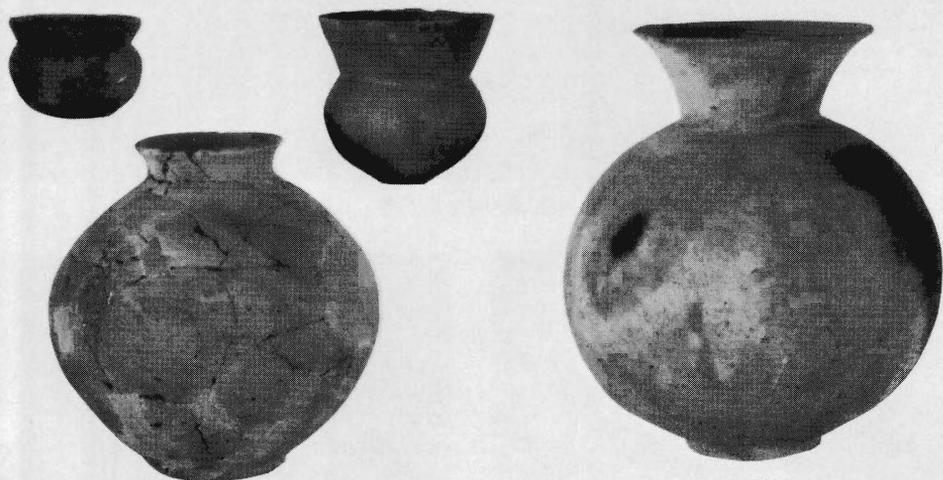
1号壺棺出土状態



1号壺棺掘り方

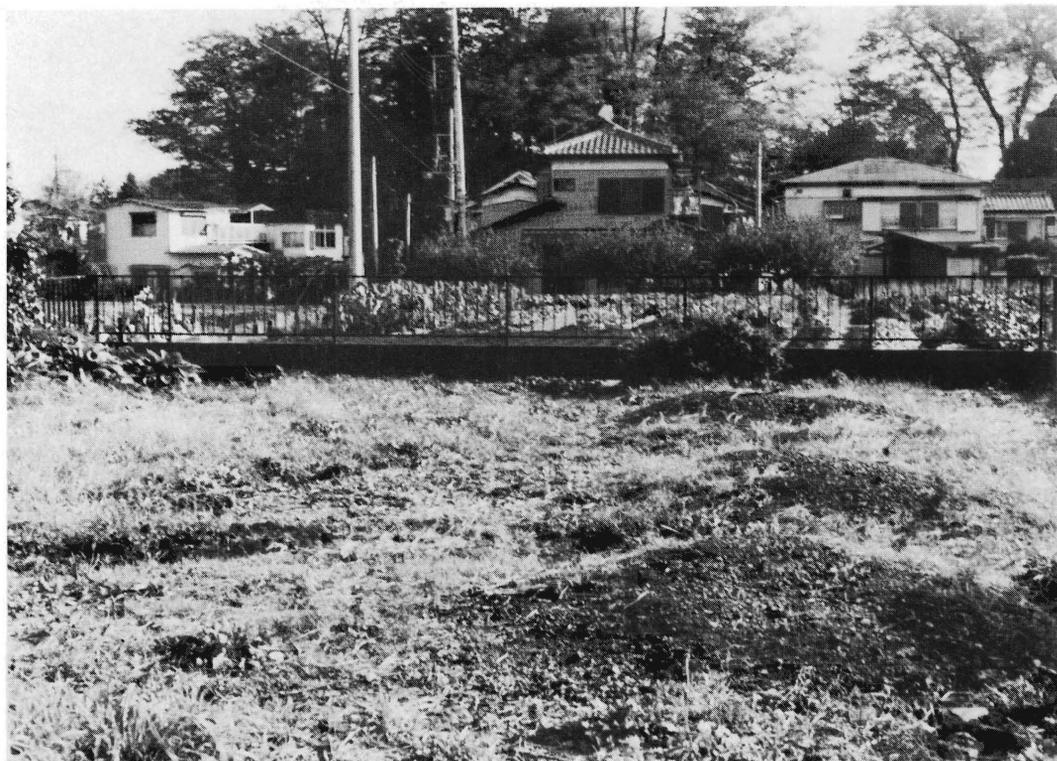


2号方形周溝墓出土遺物・1号壺棺



2号方形周溝墓出土遺物

1号壺棺



調査区近景



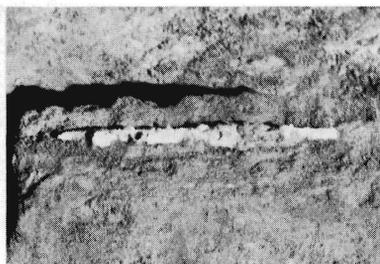
発掘風景



68 B号住居跡



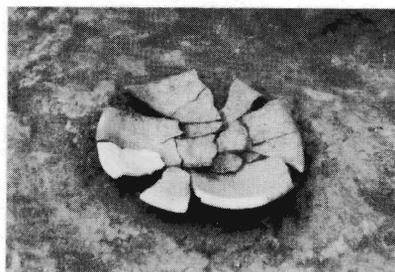
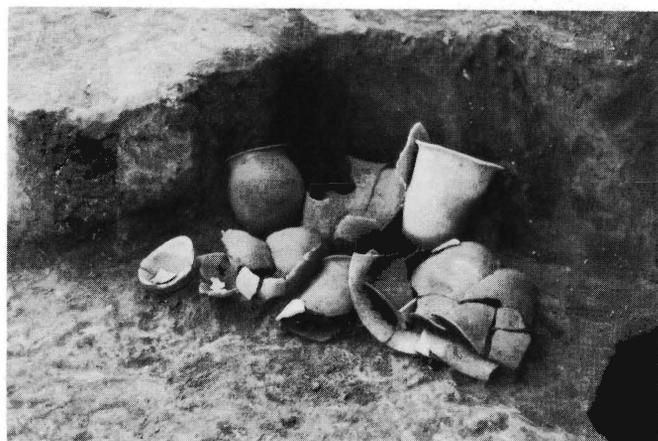
68 A · B号住居跡



刀子出土状態



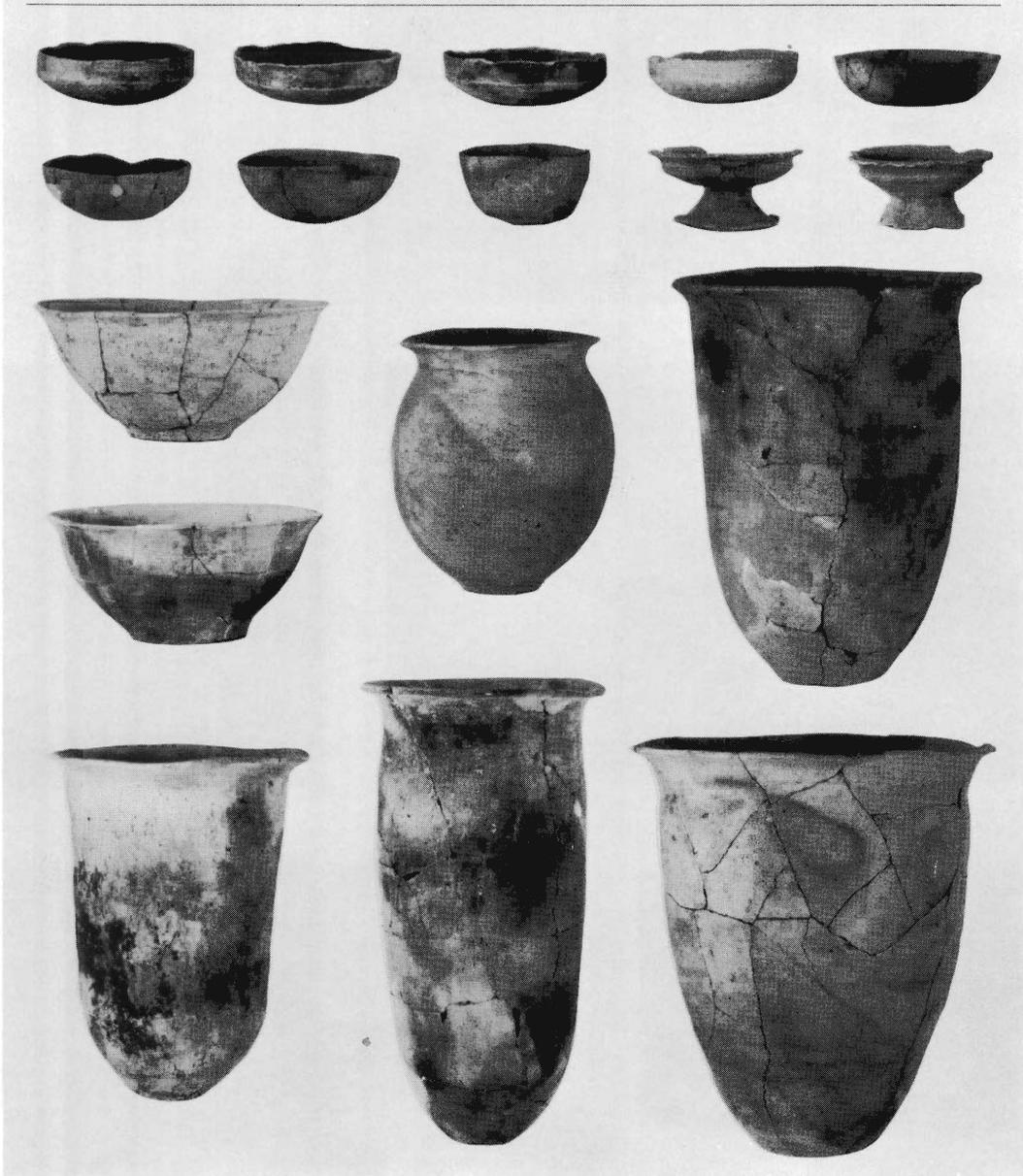
69号住居跡



69号住居跡遺物出土状態



68A号住居跡出土遺物



69号住居跡出土遺物



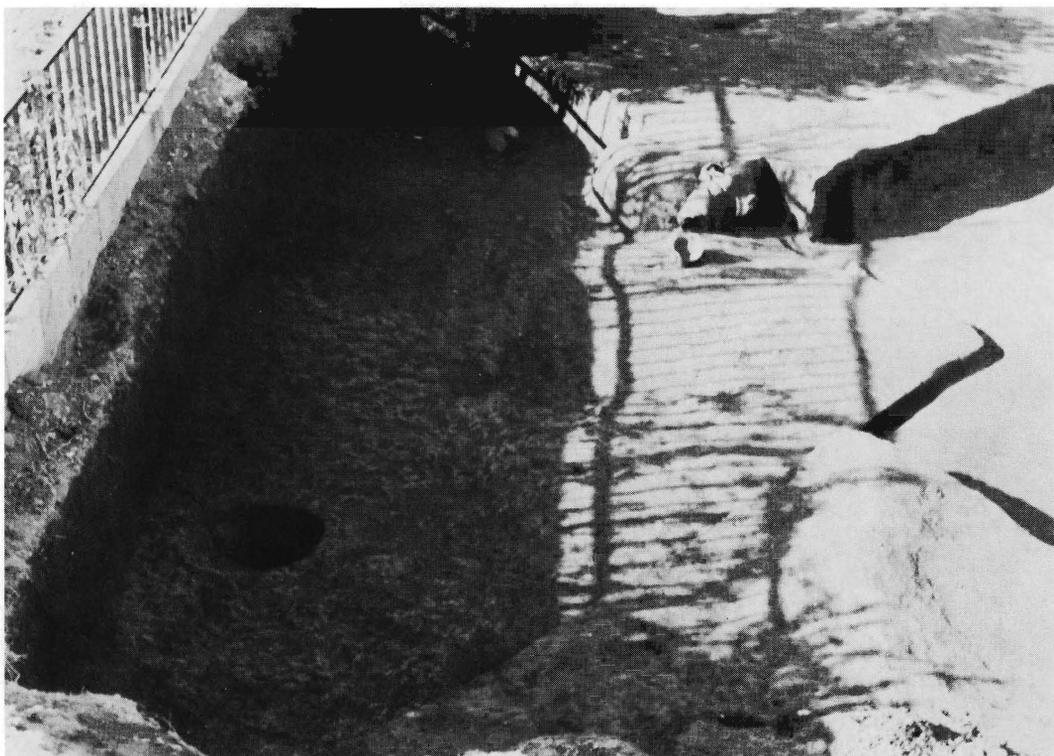
調査区近景



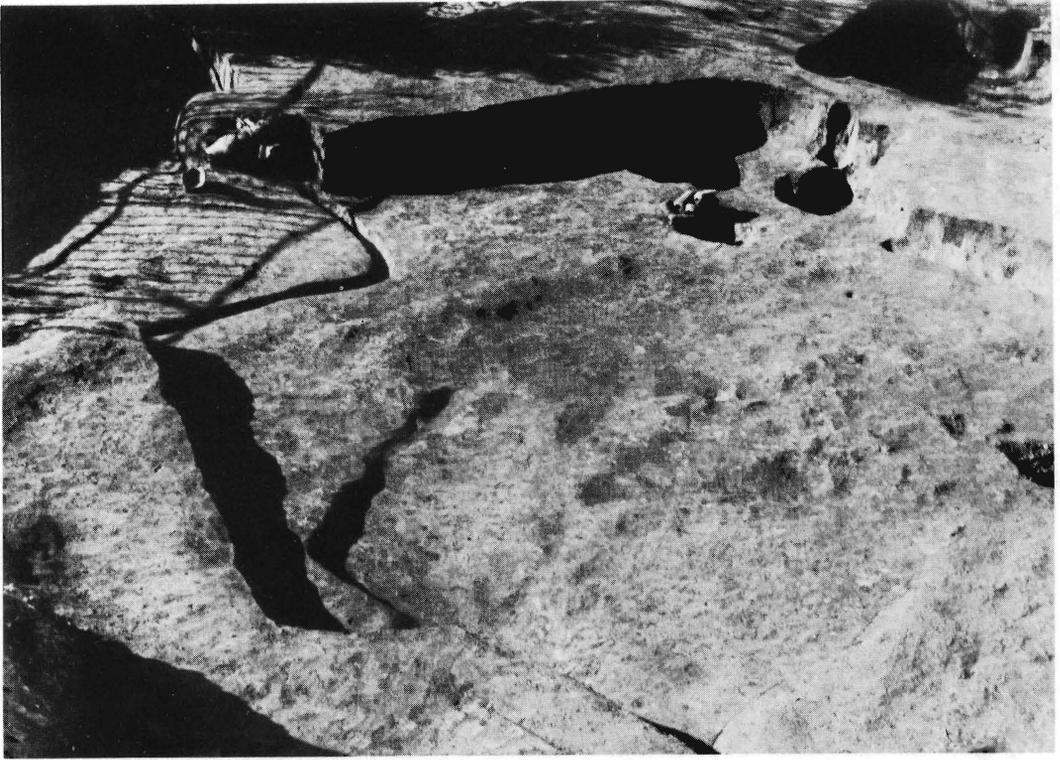
70号(下)・74号住居跡



70号住居跡カマド遺存状態



71号住居跡



72号住居跡



73号住居跡



73号住居跡出土遺物



75号住居跡



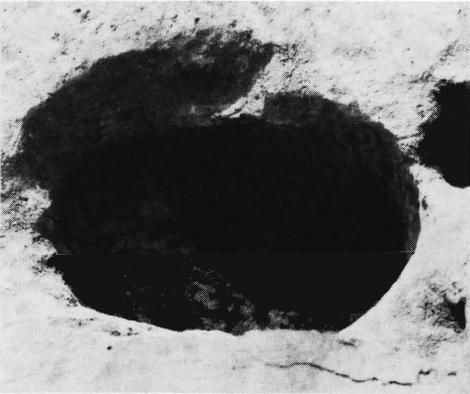
63号土坑遺物出土狀態



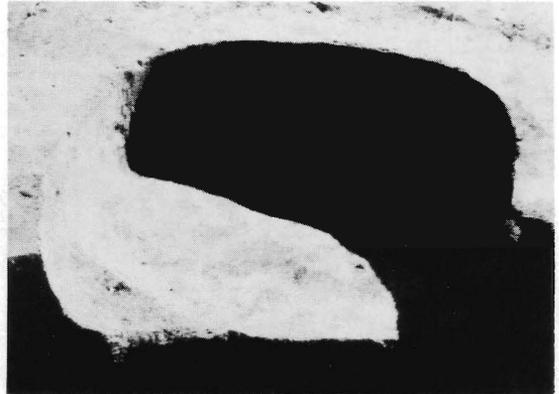
61号土坑



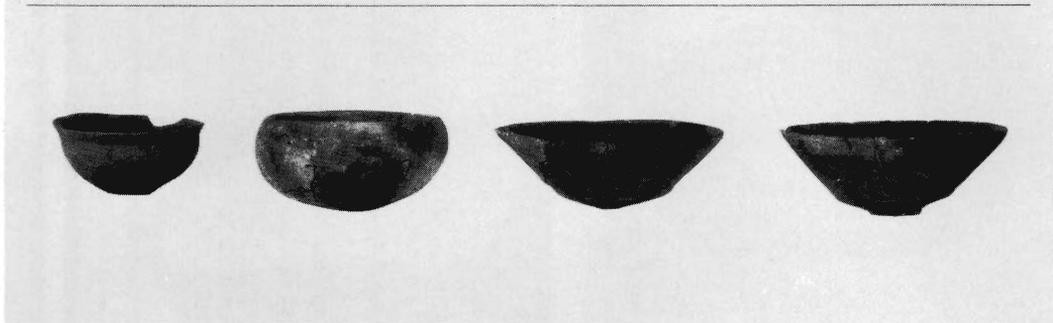
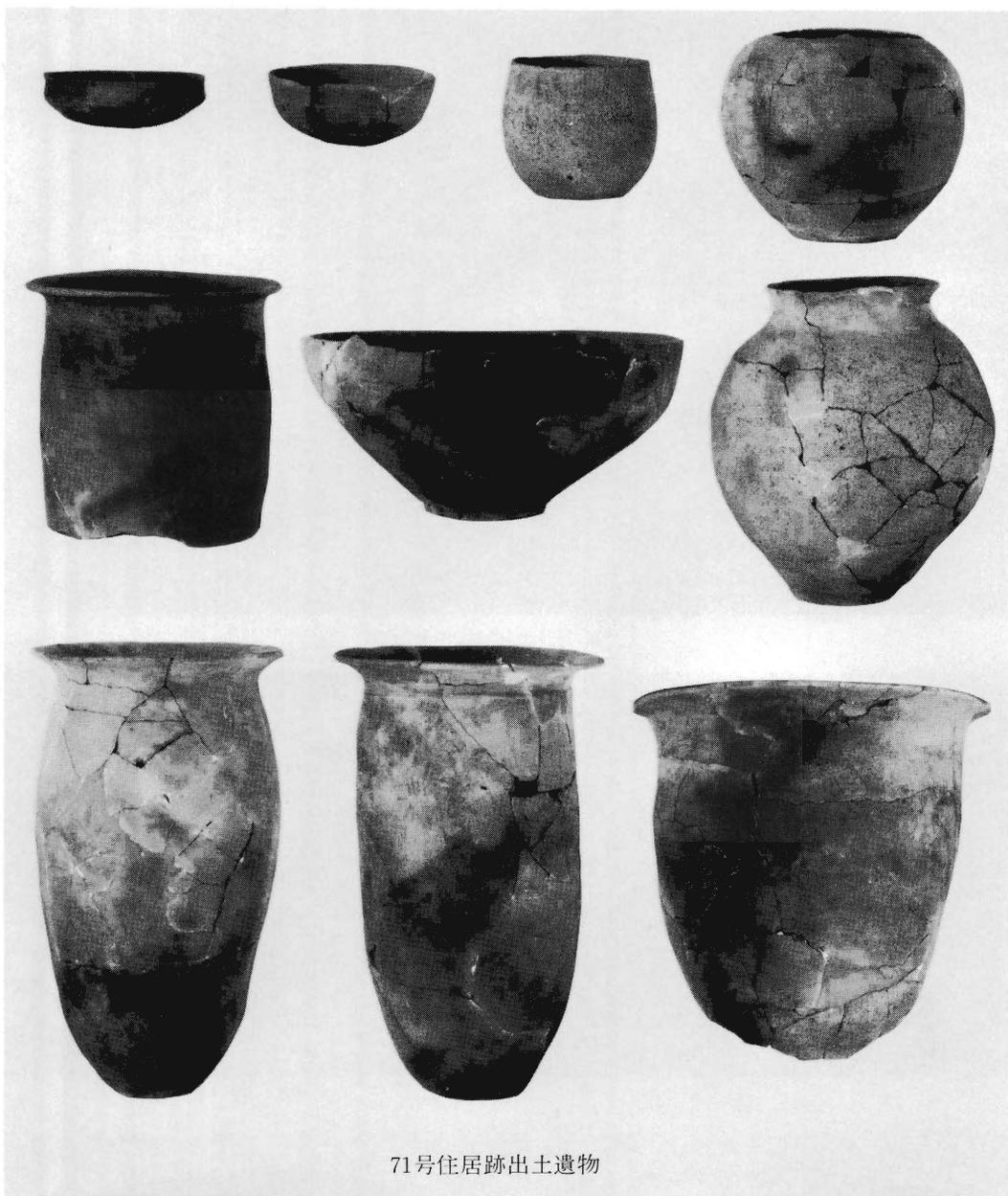
64号土坑

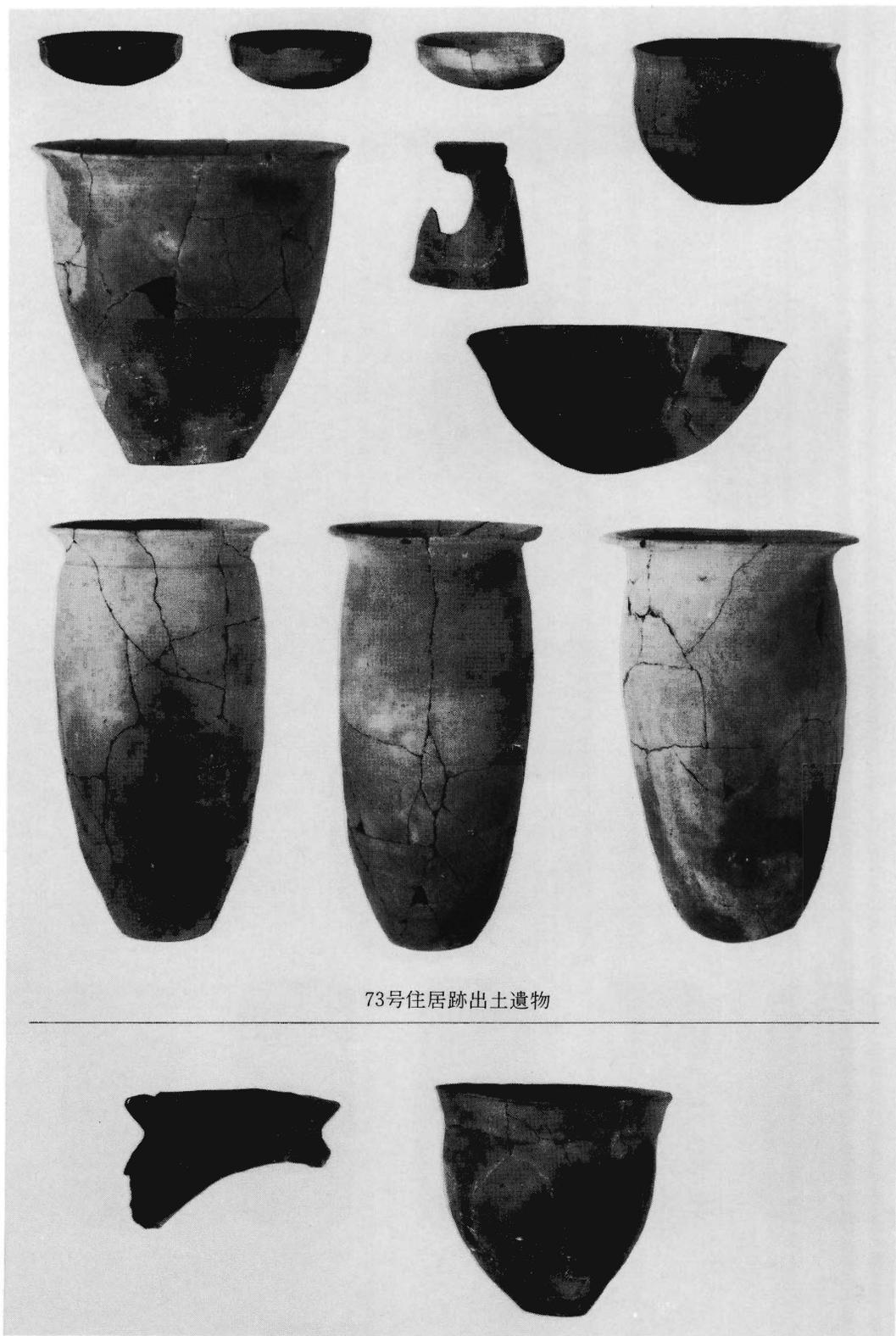


62号土坑



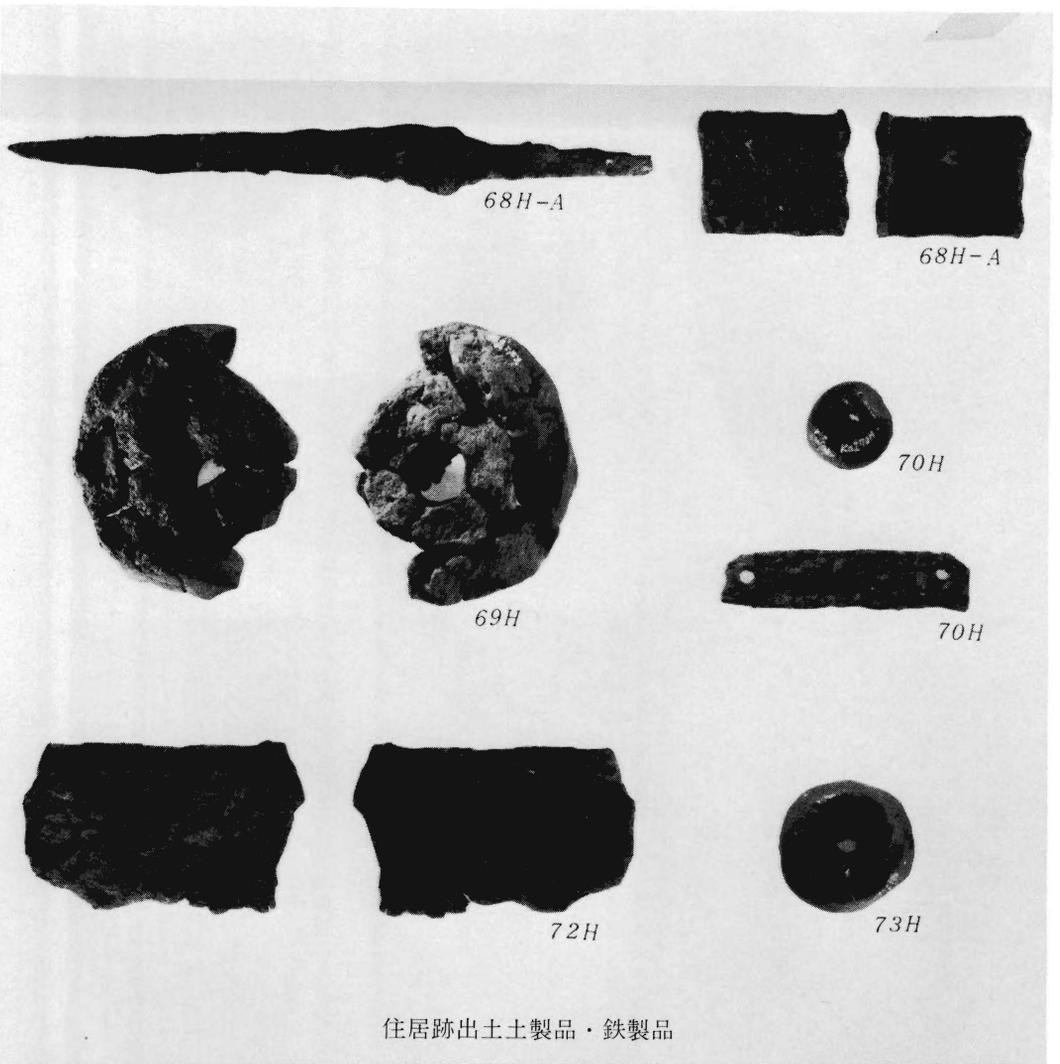
65号土坑





73号住居跡出土遺物

75号住居跡出土遺物



63号土坑出土遺物

志木市の文化財 第16集

志木市遺跡群 III

発行 埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号

発行日 平成3年3月30日

印刷 梅田印刷株式会社

